

# 子供の漁・狩猟

著  
渡辺  
聡

まえがき

「子供の漁・狩猟」これが良い。これでこそ神田に來た甲斐があるというものだ。本屋街に「子供の遊びを書いた本」は無いか？と探しに來た。古書センターで紹介された子供の本専門店も訪ねた。今の時代、インターネットで調べれば「懐かしい昔の遊び」についてイラストを含め沢山説明が出てくる。しかしいずれもおとなしい遊びを書く資料で生々しい遊びについては書いたものが無いように見受けられる。

今住む熊谷市、男の子が集まりさえすれば、すぐに電子ゲーム中心の遊びである。しかも殺戮のコンピュータゲーム遊びに夢中で有る。結果として想像力の欠如、正常な闘争心の欠如となるような気がしてならない。遊びから得た夢が実現しない人の世で、弱気で失望し、直ぐに死を選ぶのではないかと。ゲームソフトによる遊びは時代の変化で仕方ない。小学校の授業にある「昔の遊びの伝承」授業程度でサバイバルを体験できるはずも無い。毎日塾通いで時間を過ごす子供たち。ひと昔前はテレビっ子と心配された子供たちだが、今はゲームソフトに感化洗脳される子供たちがいる。これが心配。

テレビさえも無い我々の時代の子供たちはなんと言われていたのでしょうか。知らない。戦後っ子だったかなー。

子供時代に体験をしたいろいろな遊びは、一度か二度の体験である。毎日同じ事を繰り返して遊んでいた訳ではない。しかし鮮明に覚えている。不思議なものだな♪その遊びの再現は自由自在である。それにどんな価値があったであろう？とは思うが。だが自立し、人生の後半を過ごす今、精神的な面を含めて生活の糧を得る手段になっているようにも思う。子供時代に経験した遊びの種類の豊富さが、アイディアの豊富さに繋がっていると思う。これも今の塾通いと同じで遊びの塾通い。生物学の塾通いみたいなものだ。そのような意味で考えてみれば、よく勉強したんだ、遊びで。

「子供の漁・狩猟」なる本を書こうか：そのような学びの本が有っても良いだろう。熱き血潮を思い出して、書き残せ。子供たちの熱き血潮が湧き出るように書き残せ。町育ちの子が経験していない、俺なら書ける事柄である。そんな思いである。

終戦直後、昭和二十三、三十年頃の遊びである。明るい雰囲気であった。戦後の暗い雰囲気が報ぜられるが、私の育った所では、そんなことは無かつ

たように思える。明るい夏の日差し、道路の「イナゴ」と言った熱い砂の上を裸足になって、熱さを感じ取ろうとした日々。春の嵐に、吹き飛ばされないうように風に向かって両手広げ、思い切り吸い込んだすがすがしい記憶が残る。田原総一朗氏が「日本の戦後」講談社、の中で書いている。「町は明るく華やいでいるように思えた。素直に言って理屈無く開放感を覚えた」と。まさに明るかった子供時代であった。

私を可愛がってくれていた、長兵衛どん宅に遊びに行っていたが、そこに文学全集の本が有り、坊っちゃん、路傍の石、たけくらべなどはそこで読んだ。小学生の頃だから、本好きだったのかも知れない。その隣がオコヤさんの家で、彼は三年ほど上であった。縁側で将棋をして遊んでもらった。上がり込んで菓子などを頂く。その向かいは孝三郎の家。一級年下の友であった。よく私の妹が苛められていたな。兄貴ぶって守ったりしてた。この子たちが仲間で、メンコ、メン棒、鬼ごっこ、ビー玉、コマ回しなど遊びの相手である。どちらかと言えば自分は何時にも負けていた方であったが。みんな、今のように塾に通っていた訳ではない。算盤や習字の塾だった妹の時代からだ。妹や弟の面倒は見させられたが、田んぼや林を駆けずり回っていた時間の方

が長い。

終戦時は三歳だったから、小学校入学時は戦後四年、卒業時は戦後十年である。すなわち記録はこの頃の遊びや手伝いを含めた子供時代の活動の様子だ。中学生になると、まるで遊びが変わる。小学生の頃の遊びは、中学生になつてクラブ活動が始まるから廃れてしまったのか、継続していたのか、記憶に無い。弟や妹たちに聞いてもはつきりしない。俺の時代で、ほんの二、三年の差で遊びが大きく変わったのかもしれない。何があつたんであろう。大きな過渡期だったかも。高学年の頃、石灰窒素やホリドールなどと農薬散布が流行し、田んぼでの魚捕りはできなくなった。これも遊びの変わった大きな原因かも知れぬ。高校時代になると一宮川での釣りや勝浦港でのキャンプ、投げ竿もあつて様変わりだ。釣りに出かける事が楽しく、海へと場所を変えて活動範囲が広がっている。この時代は子供の漁には似つかわしくない。見えない海を予想できるか？オリンピックのサーフィン場を作るとか、金の臭いがブンブンとする。失われ行く「ふるさと」の原因である。つまらなくなつた。貝を採るのも禁止。浜辺に駐車するのも有料。すべては利権者の物だと言う。釣りをするにも金、子供が遊ぶにも金、いったい自由な海は何

処に行つた。人が浜辺を壊している。貝も魚も寄り付かなくなる。人も寄り付かなくなる。そのうちに張り巡らされた防波堤も波で壊される。その時こそ自由な浜辺が戻つてゐるか。

昭和三十年頃の九十九里浜の様子は「写真集 九十九里浜」に小関与四郎が残してくれている。追加して浜の様子を書こう。地引き網をする船があちらこちらの海岸に引き上げられていた。まさに引き上げられていた。船を出すのに都合良いところの目印に鳥居が建てられている。ミオ（水脈）と言う。鳥居とその浜に向かった道筋に、船を波に乗せ海に押し出したり引き上げたりするために、コールトールを塗った滑り台を並べる。トツプレスのおぼちやん達が腰に引き網をつけ、上がってくる船を引く。船上には、ブラブラしないようおちんちんを腰紐に結んだ親父達がいる。皆激しく叫びながら、打ち寄せる波に合わせて船を引く。地引き網の引き手は船が上がる時刻になると鐘が鳴りわたり、それを合図に集まって来る。その手伝いの引き手と共にかけ声を合わせて網を引く。主力の鰯は桶に入れられ運ばれて行く。一部の異種の魚は引き手に分ける。子供達は逃げ惑う魚を採って食べたり、ヨブと言つた水溜まりで遊ぶ。そんな風景が思い出される。

一・最初に

子供の頃の行動範囲を地図にしてみた。交通機関を利用した事はほとんど無い。覚えているのは、時に母親の実家がある浜宿に行くのに、茂原から本納まで房総東線、本納から観音堂まで小湊バスを利用した事。自宅から茂原



駅までと、観音堂から浜宿までのかなりの距離を歩かねばならない。だから自転車で行くのが当たり前であった。キロ数という距離感はなく、ただ通り過ぎる場所の記憶のみで自転車をこいだ。

夏休みの行動範囲は母親の実家を中心にして海岸、南白亀川、実家の裏方にあるおばさんの実家、そして寺や墓が行動範囲であった。姉が「浜宿の叔父さんが描いたカンナのを持っている」と言う。言われて見れば思い出した。鴨居に掛かっていた。それに東郷大将、もう一人軍人の写真、昭和天皇、戦死した叔父さんの写真も。槍が一本かけてあったな。満州から叔父さんが引き揚げて

来て、一時期まだ実家に居り、縁側でアリランの歌を覚えてくれた記憶あり。その後直ぐに、高師の線路脇に家を建て、嫁さんを貰った。従兄弟が六年下だから戦後二年であつたはず、開拓団時代や戦争の話は全くしない。ただアリランの歌を覚えてくれただけである。



住処の周囲の行動は歩きのみである。近くに同級生はいない。同級生の家も学校以上に遠く、行ったことはない。家の周囲、お宮、天神様の周囲、我が家の田んぼのある周囲が行動範囲であつた。下級生か上級生が遊び相手である。少し遠い範囲といえば花見に道表山に行くか、釣りに豊田川に行く範囲であつた。

ご近所は先に書いた、長兵衛どん、その隣がオコヤさんの家、その

向かいには孝三郎の家。天神様には祭りの時にしか行っていない。圧倒的に家の前庭、お隣さん、田んぼや南側の小川が行動範囲である。夏の道路は砂が粉状（イナゴと称した）になって、足が焼ける。この焼けた砂、イナゴの感触は忘れられないな。履き物は靴ではなく、下駄であったり、雪駄であったので。その砂を集め、道路上で砂遊びである。磁石をイナゴの中に引き回し、砂鉄を取るなどしていた。採った砂鉄はどうしたろう？紙の上に磁力線の絵模様をつける程度の楽しみだった。

近所の子供たちはこちらから遊びに行かねば集まらない。必然的に一人遊びだったか、弟との遊びだったはずだ。姉や妹と遊んだ記憶が無い。弟とはピー玉位か。家の中や庭で遊んだくらい。お守りはした、というかさされた。姉が手伝いを逃げて母親に追い回されていた記憶もある。兄弟愛なんてあったであろうか？お正月に歌留多や双六、将棋などは弟、姉妹でやったかも。年が離れ過ぎていたせいか？多くは一人で遊び歩いた記憶だ。

庭であるが軒下が庭の始まり、瓦屋根から落ちる雨垂れで削ずり取られ、雨の時は小さな流れができた。長靴で入り込みピチャッピチャと遊ぶ。庭はメンコやピー玉の遊び場所であるが、筵を敷き藁を干したり豆を干す場所で



もある。まして農繁期には何枚も広げた簀の上に稲こぎ機や脱穀機を置いての作業場所である。にわとりの遊び場所であり、もちろん一部に植木もあつたし柿や梅等の木も植えてあつた。広いのだ。大概の家には家の中に土間があつた。土間とは石灰を撒いて踏み固めたもの。長年踏み固めていると非常に堅くなる。玄関を入つた部屋への上がり口が、

或いは別棟の小屋の中、釜竈の前や風呂釜の前などがこの土間である。そこに簀を敷いて座り、焚き火をしたり風呂を沸かししたり、ご飯を炊いたりする。雨の日はここで縄を拘ったり、収穫物の置き場であつたり、使い道が多様であつた。家の中の庭、楽しい場所である。

家の土間の話が出てきたついでに縁の下の話である。すなわち廊下や座敷の下は空間で、子供は屈めば入れた。大概は竹竿や長い木の保管場所。梯子などもそこに廊下側から差し込むようにして保管してあつた。この縁の下に

ボールが転がり込んだり、遊んでいたコマが飛び込んだりして、それを取るために潜り込んだ。時にそこに思いがけない物を見つかったり、蛇なども逃げ込んだりしている。

竈も各家にある。釜や鍋を置いてご飯や煮物を作っていたから、手伝いでこれらも使いこなしていた。冬の夕飯作りは竈の前に座り込む。暖かいし、つまみ食いはできるし楽しいものであった。風呂も同様、木製の風呂桶で、沸かす薪を加えながら火に当たり、煙を避けながら芋を放り込む。焼き芋である。何時の頃か井戸にポンプがついて水道になった。町の水道ではない。自分の家の井戸水である。井戸は浅く、時々入って底の砂を掻き出す。ボウフラを食べさせるために鯉を井戸に放していた。そういう意味では汚かったのだな。井戸から「つるべ」で汲んだ水をガブガブと飲む。井戸の縁に置いたブリキ製のバケツを傾け、直接口を当てるから金属味を感じながらである。借地であった。母親の死後土地を返す時にこの井戸を埋めた。井戸の神様に祈りを捧げた後に。地主の指示である。

地主はお隣さんである。その家は入り口から庭までの小道「じょうぼ」が長く、脇にカラタチの生け垣、反対側はニツキの木と榎の木、茶の木の生け

垣であつた。じょうぼ、その地面に絵を描いたりビー玉をして遊ぶ。カラタチの青い実が記憶に残る。ニツキの根を掘ったり、茶の木に絡むカラスウリを採ったり。さらに庭に入ると左手に池があり、ザリガニ釣りや食用蛙を釣るなども。池の端には豆柿の木があつた。この柿の実が秋になり熟れると美味しので採りたくなる。よく怒られたな。『ケチッ』、ではない、柿の木は折れやすいのだ。それを心配した隣のお爺ちゃんだ。さらに甘茶の木がある。葉を採り、ノートの間挟んで押し葉にした。これは非常に甘くなる。庭の奥にはオニユリが群生していた。南側の通りに面したところにコの字に曲がつた松の木があつた。腰かけ夕陽を眺めていたある時、揺すっていたら女の人がキヤーツと悲鳴をあげて逃げ出した。夕刻だからお化けと間違つたらしい。このお爺ちゃんは珍しい木を植えるのが好きだったようだ。

この家に上がり込んだ事は何回もない。これに引き替え、向かいの家には夕飯を食べに行ったり、お泊まりをしたり頻繁に出入りしている。親しくしているお婆ちゃんがいた。しかしここの庭といえは榎の木や紅葉であり、実のなる木は夏みかんの木程度、遊び場所も無く面白くない。もっぱら夕刻以降の遊び場であつた。子供のころ使い分けていたんだ。遊び場所の説明が家

の解説になってしまった。

## 二・学校帰りの途中は

当時は通学路なんて決まっていなかったから、あっちの道こっちの道、いろいろな道を帰った。だから「道草を食わないようにしよう」と児童会で決まったりしてた。道草で四つ葉のクローバーを探す。通り道の草を結んで、誰かが引っかけて転ぶのを予想し楽しむ：イタヅラである。ツバナを抜いて甘味を噛む。スカンポの酸っぱさを味わう。さらに垣根にからむ乳花のうす淡い甘さの蜜を吸う。ツツジの花も摘んで吸うと甘い蜜の味がした。麦のクロンボ（病気になった麦の穂）を抜いて麦笛を鳴らす。タンポポだって花の茎は筒状で良い草笛になった。小川に放り込まれている竹筒を引き上げてみる。これもイタヅラ。

小学校の裏山、校舎の裏手に洞穴があった。結構大きくて立って入れる。粘土質で、入り口は雨が降ると滑って入れない。が、粘土を採って粘土遊びができた。一番奥迄は入った事が無かったように思う。蝙蝠がいてこれを捕まえ、蝙蝠の温もりを遊ぶ。その裏山は登り道があり、理科の授業か図画の

## コウモリ



授業であったか、その山で植物の観察やら絵を描く事やらした記憶がある。縦断すると渋谷方面まで続いて、遠回りして帰って来たりしたようだ。

小学校は二段になっており、丘の上が三、四年生と中学生、下が一、二年生と五、六年生の校舎である。上の校庭には小さい松山と池がある。庭中央に松の木があり、その松の木が馬乗り遊びの支柱。下の校庭は広く、周りは核の木で囲われ運動会が行われた。また中学生の野球場がある。学校では相撲や陣取りが遊びの主であったような気がするが、授業でも池の生物やゴを探したり、カエルの解剖、ザルの工作、模型飛行機の工作、裏山の探索、馬乗り、騎馬戦等を覚えている。夏休みのクロンボ大会は恒例だ。工作の宿題は何を作ったか覚えが無い。絵日記も最後の三日間で済ましたり。昆虫採集の宿題もあったが貝殻の収集、蝶やトンボの採取くらいか、蝶にはあまり興味無かった。注射器とアルコールなどがセットになった標本作りの

あるが、に、ウナギの孔を見つけては手を突っ込む。要するに道草である。集団登校はなかったから、一人か二人で帰ってくる事が多いからだ。

学校帰りの途中に豊田川が流れる。水門もあり良い釣り場所である。豊田川は茂原発祥の歴史に出てくる、古くからある川だ。もちろんかなり後になって知った事。昔、藤原氏の時代、恩賞として上総一ノ宮川からこの支流豊田川迄を領地としてもらい受け、一宮に本拠地を置いた藤原一族が発祥の元の様だ。原っぱであったので茂原と言うようだ。開墾し領地を広げて来た。自分のルーツも興味のあるところだが、父方は住む豊田村に近く大網寄りの吉田村、母方は九十九里浜に近い浜宿。浜宿は昔の時代の大津波で海岸から五キロほど奥に移動したんだと推測する。それが浜宿上の台。九十九里の住民の元は紀伊から魚を求めて移り住んだ人達が原点の様だ。俺はやはり弥生人かなー。それも作家、五木寛之の言うマージナルマンか？

道具が売られていたのだが、注射器を使うのが面白くて。

冬、大雪の時があった。学校迄、雪の中を一時間ほどかかって到着。誰もいない。わか子という子と二人しか来ない。当時は休みの連絡網など無かったし、電話も無かったから休校を知らない。雪がさらに積もり、さすがに母親が迎えに来た。氷っている朝は田んぼの中をショートカットして突っ切る。今のように灌漑が進んでいないから田んぼには冬も水があった。春は用水へ子供にとっては川で



### 三・遊び各種

#### コマ

コマ遊びは近所の子たちが集まって遊んだ。学校でも遊んだな。コマ網の元に付いている「はたき」を使って、回す時間の長さを競うのはおとなしい遊び。多くは叩き付けと称して、回っている相手のコマに自分のコマをぶつけて弾き飛ばし、自分のコマが回っていれば勝ち。相手のコマがぶつつけられても回っている場合は、お互いに「はたき」ではたいて回転の勢いをつける。長く回っている方が勝ち。弾き飛んで人にぶつかったりするので小学校の児童会で、「叩き付けの遊び禁止」が毎回取り上げられた。



その遊びに勝つために、コマは饅頭型を買い求める。心棒を抜いて、ドンダリの木の小枝で自作した心棒に取り替える。中太にして折れにくくする。クチナシの実で饅頭の部分を黄色に塗る。強そうに見せるのである。コマを回すコマ網も、麻やフラツ



クスという植物の葉を叩いて採った繊維を使い、自分の好みの長さ、太さに  
絣う。叩きつけて回すのに都合の良い長さ、太さと柔らかさにである。巻は  
じめの細い部分には布の切り裂いたものと一緒に絣う。こうするとコマにう  
まく、早く巻くことが出来た。遊ぶにつれ饅頭ゴマは傷だらけになる。これ  
が戦績を物語る。市販の色つきゴマは軽くて弱いのでベケであった。ペーゴ  
マは中学生や高学年の遊びであったような気がする。

### メンコ（面子）

丸いメンコと四角いカード状の物があつた。描かれている絵は相撲取りや  
歌舞伎役者、俳優のプロマイドなど。カード状の物は手で弾いてひっくり返  
す遊びに使う。主として丸いメンコが戦いの道具である。戦いの場所は土の  
上で、凸凹の場所あり、濡れた場所あり、坂になっている場所あり、木屑等  
の障害物ありで、それが遊びを更に面白くしている。場所は何処でも良かつ  
たので友の家の陽当たりの良い庭が舞台であつたんだ。相手のメンコを自分  
のメンコでひっくり返して遊ぶ。相手のメンコ近く、地面にあおるように叩  
きつける。相手の物がひっくり返れば自分の物になる。ひっくり返らず、自



分のメンコが木の枝など障害物にひっかかれば、相手にとって都合が良い。

こんな遊びも。庭に直径三十センチ程度の円を描き、円内に入れたメンコを、他のメンコで弾き出す。その為にメンコの端を折り曲げて相手のメンコを出しやすくする。あるいはあおるように叩きつけてひっくり返す。これにはメンコを故意に湿らせて重くしたりした。こうすると叩きつけやすくなるし、ひっくり返りにくくなる。時には「出た」の、「出ない」の言い合いになる。判定も皆でするので相談や交渉力も付いたはずだ。強い子は箱の中に何百枚も戦利品として持っていた。

### メン棒（釘刺し遊び）

この遊びも地面に、三寸釘、五寸釘など太い釘を叩きつけるようにして刺して遊ぶ。地面が固すぎれば刺さらない、柔らかすぎれば深く入り込んでしまう。適当な所を選び数人で交互に刺して遊ぶ。相手の釘を弾き飛ばして刺さったら、はじき飛ばした釘をせしめる。また相手の釘が倒れても良い。自分の釘が刺さらず、倒れてしまった場合はそのままにしておき、次の相手はその釘に接するように刺して弾き飛ばせば良い。倒れた釘は格好の餌食とい



う訳である。強い子は戦利品としてたくさんの釘を持っていた。これも危険な遊びとして児童会で禁止を食らう遊びだ。また刺した釘との間を直線で結び相手の直線を閉じ込めるやり方もあった。これは釘の取りっこではない。

### 将棋やかると

家に将棋盤が有った。大概の家にも有ったので、近所の友の家の縁側でも遊んだ。子供用に軍隊将棋というものが売られていて、紙の将棋盤で遊ぶ。オセロはまだ無かったな。双六やいろは歌留多は「小学一年生」という月刊誌に付録として付いていた。トランプや花札は友人の家にありそこで覚えた。中学生を真似て覚えたが子供には難しかったようだ。賭の対象のイメージもあつて遠ざけていたようでもある。

将棋。詰め将棋はもちろんのこと、はさみ将棋、積み木崩しなど弟、姉妹と遊ぶこと多い。相手のいない時の将棋は、「家の光」という雑誌や新聞の片隅に詰め将棋の問題が掲載されていてそれを楽しんだ。囲碁は近くに碁盤のある友の家庭が無く触れる機会が無かったな。大学時代の友人に囲碁をたしなむ人が多いので、当時は当たり前の遊びの一つであつたろう。軍隊将棋をは



つきりと覚えている訳ではないが、調べると軍人将棋と言い、いろんな種類があったようだ。駒はタンク、飛行機、大将、少将、歩兵等々。動かし方は忘れてしまった。

折り紙や塗り絵は売られていた。先の雑誌「小学何年生」にも付録として付いていた。鶴くらいは折れたがお手玉やおはじき、あやとりと同様に女の子の遊び。せいぜい新聞紙やノートの切れ端で兜を作る、三角に折って降ろしてパチンと鳴らす程度であったと思う。お手玉は姉がよくやっていた。自分はむしろお手玉にする中身、数珠玉を採取にゆく。このほうが面白く思った。正式名は知らない。調べると数珠玉という名の稲科の植物のようだ（ウイキペディア）

## ビー玉

透明な緑色の大中小のガラス玉が主で他にカラフルなもの、内部に色が閉じ込められたきれいなビー玉などもあった。色とりどりである。遊び方はやはりビー玉の取りっこである。庭に円を描き、その中に各自ビー玉を入れる。遊ぶ人数により二個ずつとか三個ずつとか決める。四、五メートル離れたと

この手の遊びについて上手がいる。十年以上年上であるから戦前の遊びになる。小沢昭一さんと神崎宣武さんの対談形式「道楽三昧 遊び続けて八十年」(岩波新書)の前半に詳しい。所変われば遊び方も変わる物だ。しかし似たような遊びで、読んでいると「確かにそういう遊び方もあった」と思い起こす事多い。今の子供との比較した感想はおなじだなー。

ころに線を引き、そこから指でビー玉を弾き、円の中のビー玉を突き出す。小指を地に置き支点にして、親指と人差し指でつまみ出すようにして弾くのである。出たビー玉が自分の物になる。最初は緑色の小さなビー玉を円に入れて、負けてくると、カラフルな大きいビー玉を入れざるを得ない、そこが狙い目で夢中になる。親ビー玉が突き出せる限りは連続して試みるこ

とができる。突き出せなかったら次の人の番である。突き出ても親ビー玉が円の中に残ったら出たビー玉を円の中に戻す。上手な人は一回ですべて突き出してしまふ。そしてはじめから再スタート。じゃんけんで順番を決めた。

もう一つの遊び方は「ぶつつけ」とか「幅取り」と言ったか、そのような遊びもあった。これも二、三人の遊び。最初、地面にスタートラインを引き、そこからビー玉を適当な方向に指で弾く。次の人がそのビー玉に向かって弾き、ぶつつけたら取れる。あるいは手のひらサイズに近づけたら取れるという手法。幅寄せである。従って最初の人には難しい所に弾いておく必要がある。



斜めの坂の所とか、穴の近くとかに。取られなかった場合は次の人の順番で逆襲をする。取られた場合はスタートラインから始める。幅寄せを防ぐために転がりやすいように道筋を手で掃いたり、口で障害物を吹き飛ばしたりして。カーリングのイメージを思い出すね。

メンコにしてもメン棒、ビー玉にしても負けければ物が無くなる。負けければ泣きたくなる。新しい物を買って来なければならぬ。新しいメンコやビー玉は格好の標的でもある。強い子は箱の中に沢山の戦利品を持つ。弱い子は常に負けるので、強い子と遊ぶのを避け相手を選ぶようになる。

### 鬼ごっこや馬乗り

家を数軒にまたがった広域の鬼ごっこ。鬼ごっこというより広域隠れんぼと陣取りである。お隣さんの庭の中から数軒離れた家の木陰などにも及ぶ。だいたい隠れる場所は決まっていたようだが、鬼も数人いるし、隠れる方も数人だからすぐに見つかる。鬼に見つかり名を呼ばれた子は決めた木にばかり繋がつている。鬼のいない間に仲間が来てタッチし、捕まっていた全員が再び隠れてしまう。そのような遊び。

馬乗りも十人くらい集まるとよくやった。中学生も加わったようであった。大きな木を寄木に、一人が前を向き立ち、小さい子を守るようにして数人で一列の馬を作る。乗り手は走ってきて、跳び箱のごとく跳び乗る。大きい子はできるだけドスンと勢いをつけて飛び乗り、つぶそうとする。つぶされると再度馬にならねばならない。つぶされなかったら交代である。人数が必要な遊びで学校でよくやった遊びでもある。主に昼休みの遊びだった。ドッジボールと共に押しくら饅頭も昼休み定番の遊びであった。

この変形だが二重の渦巻き状の円を地面に書いて、その筋に沿って歩いたり急に駆けたりしてタッチして捕まえる。あるいはS字状に地面に書き、出口から出てその丸円状の内部に塊に集まっている相手の子たちを、外から手を伸ばし、円外に引き剥がして捕まえる遊びなども。縄跳びなども学校の体育の時間でも行なったのである。自宅の庭でもよく実施。二重跳びは当たり前前にこなし、三重跳びにも挑戦している。ひもは荒縄を探ってきて自分で長さを調整していた。



## 凧あげ

凧上げもまた冬の遊びであった。買った凧は勿論であるが、自分で作る凧が当たり前。何回も作った。学校で工作の時間に作った記憶もある。市販されていた凧の模様は、赤く染めた両袖に中央を丸く抜き、そこに何かの絵が描いてある。たとえば金時絵とか文字とか。小型のものと中型のもの二種あったようだ。小型を、それをまねて竹籤で骨を作り、障子紙を張り、絵の具



で赤く塗る。吊り糸は二本、この吊りの張り具合が難しい。上げる角度が必要なので、凧の頭の方が引っ張られるように、横から見て直角より少し小さな角度の三角になるように張る。そして重心が下に来るようにヒラヒラの尾をつける。これを長くして楽しんだ。長くすれば重くなり、当然のことながら風が弱いと上がらない。長い方がヒラヒラして面白いから長くしたい。五月の節句の頃大人達が上

げ、子供たちは正月の遊びであつた。

大人の作る凧は吊り糸が八本とか十二本とか大きい凧である。そのような凧は長い吊り糸の重みで弛むのでその調整も必要になる。加えてうなり音をだす弓を頭に張る。その構造を説明する。篠竹を折り曲げ弓を作る。藤蔓の皮をなめして、風を切る時に震動し、うなり音が出るように平たい弓蔓にする。凧の頭に、角度を調整して、風を切るようにセットすれば、ブーンとくなる。遠くでこの音を聞くと、誰かが凧を上げているなと判かり、見に行ったりもした。親父も凧作りが好きで、大きな凧を作り、凧絵も専門の絵師が描いた物を求め、紐も麻縄で拘う。うなりも付けて飛ばすという盛りようであつた。うまく飛ばせた記憶は無いので、親父も作る楽しみの方であつたのであろう。そのおかげで吊りの張り具合、新聞紙を細長く切った凧の尾の付け方、草を凧の尾の代わりにぶら下げたりなどを覚えた。

凧を卒業すると模型飛行機であつた。これはお金が必要で、ある程度のお小遣いを貰う高学年になってからである。学校でも工作の時間に、模型飛行機を飛ばした。滑空で上昇し滑空で着陸させる。上手にできるようになるにはかなり試行錯誤が必要であつた。ゴム紐の工夫程度では車輪がうまく回



らず、滑空がうまくゆかない。車輪や翼の部品は買つて来ざるを得無かったのだがとにかく夢中になって改造をした。中学生になつてもグライダーの工作がしたくてしようがなかった。グライダーは形が大きく高価でその金が無くとうとう手が出なかつた記憶である。スクリュウを回す船の模型が市販されていた。これ入手して組み立てる。ヨットの組み立てをしている子もいたな。幼少時期は風呂場でほんぽん蒸気船である。ロウソクを灯してボイラーを加熱しペンペンと音を立てて動き回るブリキ製であつた。

### フラフープ、自転車乗り

一時的に流行つた物ではフラフープがあつた。これは小学校の高学年であつたと思う。やりすぎて腸捻転になつたという話が学校で噂になつた。同じようなリングを使う遊びは自転車のホイールを転がす遊び。なぜか自転車のホイールが入手できた。自転車も壊れやすかつたのかも知れぬ。これはかなり遠くまで転がして行つた。自転車の三角乗りをやつていた時期と重なつていたのであろう。子供自転車なぞは無かつた？時代である。あつたのかもしれないが近所には持っている子はいなかつたし、三輪車を過ぎれば皆、三角



乗り、それを超えると中乗りである。したがって婦人用自転車は都合わるく、中に棒の支えのある男用自転車を使う。

三角乗りはサドルを左手で抱え、右手は右ハンドルとブレーキを持つ。左足を三角の向こうにまで差し入れ、左側のペダルを踏む。走り出したら右足を右ペダルに置き、こいでゆくののである。中乗りはサドルまで尻が届かない

背丈の時に。真ん中を通る心棒をまたぎ、ここに尻を乗せてこぐ。しよっちゅうチェインがスポンの端に引っかかり外れ、からまった記憶である。

#### 兵隊蜘蛛の戦い

蜘蛛と言えば兵隊グモ（コガネグモ・ウイキベディア）。庭の木と木の間に巣を張っている。中央に何やら、兵隊の階級章よろしく模様を編みである。その真ん中に、尻に横線の黄色の鮮やかな模様をつけた大き



ここ熊谷では二等兵？クモ  
尻が細ーい



な蜘蛛が威張って張り付いている。遊びは同種の蜘蛛を捕まえて来て、勿論手で捕まえるのであるが、蜘蛛の網に放り投げ付着させる。家主は気づくと、網を前後にボラントリンのごとく振り、侵入者を振り落とそうとする。侵入者は中央に向かい家主に闘いを挑む。激しい闘いである。勝った方は尻から蜘蛛の糸を出し、ぐるぐる巻きに捕獲してしまう。その場所に放置し、中央に戻り勝どきの雄叫びごとく、悠然と構える。ぐるぐる巻きにされた方は、

そのままにしておくと思われちゃうので蜘蛛の網から外し、ぐるぐる巻きを解いてやり、逃がしてやるなり、他の蜘蛛の網に放り投げ再び闘いに挑ませる。

庭に小さな穴が幾つも開いている。蟻の穴とは明らかに異なる。その中には虫がいた。ニラムシと称していたが正式な名前は知らない。その穴に萼の葉を差し込むと、その虫が釣れる。釣り上げる行為が面白くて穴を探し回る。家の土台の周囲には筒状の袋が土のなかに潜ってい

る。入口が土台に寄り添って付着しているので、チチンブイブイ言いながら、それをそろりそろりと引き抜く。その袋の底に或いは中間に蜘蛛が潜んでいて、袋を外部から押すと何やら潜んでいることがわかる。地蜘蛛と言う名か？その引き抜く行為を楽しんだ。

#### 四・飼う

親父は農協に勤め、サラリーマンであつた。かつ三反百姓でもある。生き物が好きで、その趣味に付き合わせられる環境で牛や豚、にわとりを飼う。一度にたくさん飼う訳ではない。一貫性も無く、当時の流行に合わせてか？いろいろな家畜、動物を飼つた。農家へ指導のため経験しておきたかつたのかも知れぬ。農家はどこでも豚や牛を飼っていたのだから。兎もヤギも経験した。にわとりは常にいた。シャモ（軍鶏）も記憶にある。この鳥は闘鶏をする目的の種で強そうな、大きく、綺麗な鳥である。それらの小屋の糞尿掃除は汚く嫌で、大変であつた。また餌に野の草を刈ってくるのである。牛が食べる量の草を刈ってくるなどは子供にとって難儀だつた。ススキやワラが好物で押し切りで細かくしてやらねばならない。大概は親父がこなしたが自



分の仕事でもあった。犬はいなかったけれど愛犬だったという犬皮の敷物があった。猫はいたな。近所には放し飼いの犬も多かったよ。繁ないで飼いましようという触れが回っていた。

その中でも兎の餌を採ってくるのは楽しい。外に連れだし食べさせながら草を採る。オオバコとか馬肥やしとかタンポポが好物である。クローバーは密生していて採りやすかった。繁殖時期になると、雄はバタリバタリと足で床を叩いてメスを狙う。子兎は可愛いものだ。山羊や牛はどうしたろう。乳を搾った記憶はない。ある程度の大きさになると売り飛ばしたのだろう。豚は二十貫豚といって、その大きさになると肉豚として売った。一度しか経験がない。

にわとり

鶏小屋で飼うのだが、毎日庭に放した。ト



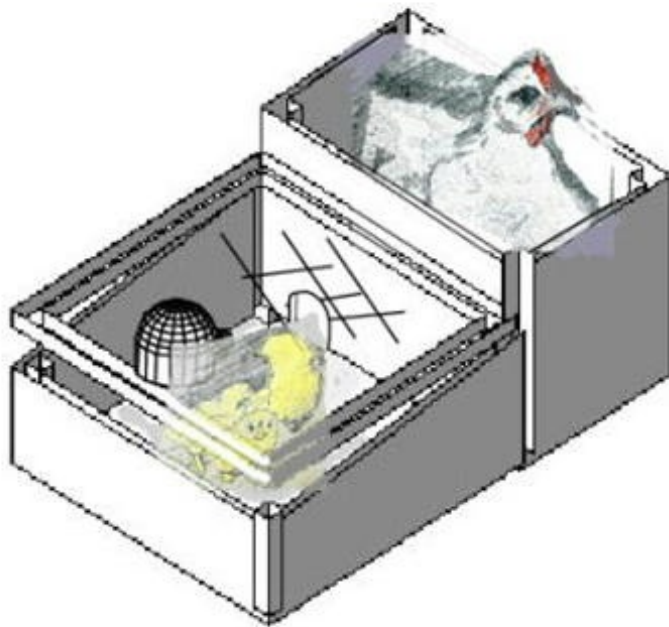
トトトトと呼びながら餌を撒くと集まって来る。普段の餌は、外に放し飼いであるから虫や草をついばんでいる。時には菜を刻んで米糠を混ぜ与える。トウモロコシなどもあげた。アサリやゼンナなど貝を食べた後は、残った貝殻を金槌で砕いて、鶏小屋に放り込む。鳥の餌である。これをあげないと卵の殻が固くならない。フニャフニャの卵ができてしまう。カルシウム不足である。イナゴやバッタも捕まえて鶏の餌にする（長野の方ではイナゴを食べると聞いてぞっとしたものだ：かなり後の事）。鶏小屋には止まり木を作っておく。夜間、にわとりはそこに飛び乗り寝る。鶏小屋の隅に藁屑を置いてやるとそこに卵を産む。にわとりは餌で呼ぶとき以外に寝できず、廊下や畳の上に糞をされ追いかけて回した。あたりかまわず糞をするので鶏小屋もすぐに汚れる。へにわとりのオシッコは見た事がない。臭い所でもある。常に臭かったな。中に入れば必ず糞を踏みつける。入らねば卵が採れない。卵は糞が付かないよう注意深く採らねばならない。

掃除も毎日ではできない、と言うかしない。加えて青草や貝殻などエサを放り投げるので更に汚い。もちろん餌箱や水飲み場もあるが、鳥はバカ、其処にも糞をする。敷き藁も鳥に踏みつけられてべちゃんこになっていて、その

上に糞をしてかつまた踏みつける。抜け落ちたにわとりの羽は白く土の色に目立ち、汚さを際立てさせた。十羽程度飼っているのだから仕方ない。寝るときは止まり木だから自分達は糞に汚れない。朝早くからコケコッコ、だから屋間は外に放し飼いである。もちろん何日かに一度、掃除はするよ。鍬で平らにするのだが。しかし好物のミミズがいるのか足で掘ったりくちばしてつついて直ぐに凸凹にしてしまう。だから掃除もしにくい。取り除いた糞混じりの土は肥料にするのだ。ことさように鳥小屋の汚さと言ったら大変なものだった。豚小屋にしても牛小屋にしても汚かったな。

あるとき小屋の隅に、見えない所に巣作りしているにわとりがいた。卵をとるため、手を突っ込んだらアオダイショウが飛び出した。びっくりしたな。――も。蛇と言えば、抜け殻が小屋の鴨居や垣根に張り付いていたな。これを採取し、足で踏みつけると駆け足が早くなるとか言って、踏みつけたが？ちつとも早くなりやしない。家は藁屋根であつたので、台風の時など、風の強い日には屋根から蛇が落ちてきたことがある。どこかの地ではご飯釜の蓋に穴を開け、そこから首だけ出さしてご飯を炊き、蛇ご飯を作るとか聞いたことがある。これは親の冗談だったかもしれない。自転車の車輪に絡まった

こともある。走行中である。だから田舎道の草の生えている道は用心せねばならない。それに歩くときも誰かが、イタズラで草と草を結んである場合もあるから。これに踏いてひっくり返る。いまのように車にぶつかる危険よりはまだましだけれど。この頃自動車は多くなかったから、車の危険はほとんど記憶にない。むしろ人さらいを恐れ、車に乗せるといふ誘いに乗らないよう教えられていた。



おんどり「雄鳥」と一緒に飼えば有精卵ができ、めんどり「親鳥」に卵を抱かせてヒヨコを孵化させる。ヒヨコ箱も別に用意した。これは親鳥が卵を温める場所とヒヨコが遊ぶ場所とを一緒にした箱である。親鳥のところからヒヨコが出られる程度の出入り口を作ってやる。ヒヨコの遊ぶところは、金網をつけた蓋状にする。親鳥のところは中に藁を敷いて、其処で孵化させる。暖め始めてから二十日ほどたち、親鳥の羽

の下からヒヨコが顔を出す。親鳥のところから出てきたヒヨコ達は、遊び場に置かれた餌箱をつつき、水飲みに嘴をつっこむ。このときが一番可愛い。ヒヨコの餌は柔らかいしゃくし菜を買い、刻んで与えた。寝るときは一塊になつて寝る。親鳥と一緒に何日でもない。トサカの形でオス・メスが判るようになる、雄は六十日程度で肉にしてしまう。あるいは誰かにあげてしまった。

親父が堆肥で温床を作り、その熱でヒヨコを育てた。百羽程度いたかも知れぬ。六十日雛という頃合いが売りどころである。ピニールシートで周りを覆い、開け閉めして温度調節をした。ところが六十日寸前で温度が上がり過ぎ、夜の内に雛が全部死んでしまった。開けるのを忘れた？か、あるいは今考えれば鳥インフルエンザだったか？当時はそんなこと知るよしもないので、仕方ない。鳥肉に仕上げた。その手伝いをして、閉口した記憶である。

まず首に包丁をいれ、逆さに吊し血抜きをする。熱湯をかけて羽をむしる。次に藁を燃やし、その炎にかざして細かい羽毛を焼く。そして手羽肉ともも肉を切り取る。内臓を取り首と胸肉を取ったと記憶している。冷蔵庫など無かったから、食べきれない。近所に配って処分をした記憶である。内臓など

は捨ててしまつてかなり無駄な処分をしたと思う。処分する忙しさだけが記憶で、可哀想だったという意識はない。親父は残念！ということだったのだらう。

にわとりの中にはチャボと言う小さい鳥も飼つたことがある。白い鳥は卵をとる目的で、白色レグホンと言う。その頃からにわとりを庭で飼うより、小さなケージの中で飼うことが流行りだした。柵を作り、横に並べた小さな区画に囲う。一羽一羽そこに入れた。区画の底は糞が下に落ちるよう、格子状にしてある。この底も傾斜をつけて、産んだ卵が前に転がり出るようにした。その箱だな作りを手伝つた記憶がある。餌やり、卵の採取を手伝つた記憶もある。またかわいそうなにわとりの印象である。身動きが出来ない。庭遊びが出来ない。

専業養鶏農家であつた訳ではない。当時各家庭で皆、にわとりを飼つていたのだ。朝二十箇くらいの卵を採取して卵屋に売りに行く。そして小遣いにした記憶である。ちなみに卵を産まなくなった鳥は「トヤになった」と言つて潰して食べる。生きた鳥の血抜きはバタバタと暴れるが仕方ない。しかし肉が固くてまずい。だいたい肉の固さで年を取つたにわとりか否か判別がつ

いた。

### 捕ったものを飼う

自分が主役の飼う作業では、天水桶にドジョウやフナを入れたり、緋鯉の子なども入れ飼う。水草を投げ入れ陰を作る。メダカは当たり前で自然に繁殖し、蛙は梅雨時に自然と入り込んでいた。水草の間に見え隠れするその鰯や緋鰯の影を見て楽しんだ。

### 五・栽培したものを、自分で料理する

ほとんど、自分で栽培をするという行為は記憶にない。母親がグラデイオラスや百日草を庭の縁に植えていたが、自分は花を植えたりした記憶は無い。小学校でも花壇があったのであろうが記憶に無い。せいぜい親父の手伝いで椎茸の栽培くらいだ。クヌギの木を買って来た。それに専用のノミで切り欠きを掘り、椎茸菌の付いた駒を打ち込む。裏庭の琵琶の木の下が日陰で、隣家竹山との境が溝であり水が溜まっていた。湿り気もあり都合が良い。そこに立てかけ、筵を被せて椎茸が出るのを待つ。自家で食べるのには不自由し



なかった。大きくなりすぎた傘状のものや、まだ丸く粘っこいものや、いろいろである。それくらいかなー。

### ご飯の釜炊き



「収穫したものを食べる」は当然の行為である。その作り方を自然と覚えただのであろう。料理の方法というより単純な煮炊きの方法である。今で言えば珍味の味わい方か。みんなこの小学生時代に覚えた。青唐辛子を刻んで甘く味噌と炒めたり、青トマトの刻んだものに醤油をかけて食べるなどすればご飯が進む。これは美味しいよ。タケノコの味噌汁。真竹であったからあく抜き作業無しである。タケノコの皮の髭を包丁の背でそぎ落として洗い、そして梅干しを三角に包み、皮が赤くなったら、その上から舐める。しょっぱくて美味しかったなー。ーはじめちよろちよろ中ばっぱ、赤子泣

いても蓋取るな」というご飯の炊き方は当然のこと、卵まぶしのご飯やおにぎり、おじやも自分で作った。餅つき、機械餅、味噌作り、麴の発酵などは親父を手伝った。そこから甘酒や豆の煮汁に干し大根を漬けたりした。梅干しを作れば、梅酢に赤漬けは必然だ。芋を蒸かして乾燥芋を作る。千切りにした大根や煎餅状に切った生芋を天日干しにする。これは乾燥途中が美味しい。自然薯芋のすり方や細い毛のような根の取り方などなど。

寒天、小豆を煮て漉し、羊羹を作る。これは母親の仕事。バットから固形状に切り出し類ぼる。あまり甘くなく小豆の香り、懐かしい味である。にわとりの裁き方は先に書いたが、フナ、鰯など小魚のはらわたの取り方、うろこの取り方も知る。たにし（タツボと称した）や、ながらみ（貝の一種）の身のほじりだし方、茹でたザリガニの処理の仕方、甘味噌煮など。今思えばこの頃覚えた煮炊きの前処理方法は多い。フナやドジョウを煮るときの暴れる音が耳につく。

小学時代は弁当持ちであった。好きな弁当は弁当箱のご飯の上に青のりや





塩鮭を乗せた弁当。ご飯が魚臭くてだめだった。領域が無かったのだ。

## 六・捕まえる

### 昆虫を

夏、道の両脇はススキや茅が生えていた。その草むらにキリギリスが鳴いている。よく絵に描かれている、麦わら帽子に半ズボンの少年の姿を思い浮かべて欲しい。まさにその格好でソーツと近づいて、いる場所を確認する。

浅草のりを一面に乗せ、箸でつついてのりに穴を開け、醤油をかけておく。真ん中に梅干し。おかずはナガラミの甘味噌煮。これが一番。特に冬時期には弁当を暖める設備が教室の前方にあり、暖まると弁当の匂いが漂ってくる。これが良い。嫌いな弁当はご飯の上に

そこに掻めてべとついたキャラメルを糸で縛り、垂らすとそれを掻めにくる。掻め始めるとなかなか逃げなく、手で捕まえる事ができた。夏の夜、部屋の裸電球にアブラゼミやカブトムシが飛んできた。カブトムシは雄同士で戦いをさせる。マッチ箱を車にして引かせるなどで遊ぶ。カミキリムシは髭が長い。紙を切らせて遊ぶが髭が邪魔になって結構難しい。

蟬と言えば、好きな種類があった。ホーインチョコチョコ、ホーインチョコチョコ、チョコインヨウ、チョコインヨウ、ジーとか。これツクツクボウシ。カナカナカナとヒグラシ。ヒグラシは羽が透明で綺麗な蟬であるがすぐに飛んで逃げ、なかなか採れなかったな。ジージーとうるさいアブラゼミ、ミーンミーンとニイニイゼミこれらの蟬は当たり前前すぎて面白くない。夕刻お宮の境内、杉の木を狙ったのだが。採ろうとするとオシッコをかけられるし。秋には、家の垣根になっている茶の木の中でガチャガチャとクツワムシが啼く。キリギリス同様の方法で捕まえる事が出来た。スーイッチョと啼く、緑色のウマオイも。虫かごに入れて、キュウリやカボチャが餌である。数日は楽しんでいたが、すぐに飽きてしまう。放してあげたのであろうか。思い出せない。



## デンブン工場とトンボ採り

シオカラトンボは面白くないから採る事はあまりしなかった。むしろ指をさしてグルグル回し、トンボが目をくるくる動かすのが面白くいたずらをした。イメージが塩っぱいからシオカラ、雌は麦わら色していたのでムギワラトンボ？



オニヤンマ

夏の田んぼはもっぱら銀ヤンマ採りである。オニヤンマではない。鮮やかな青い色、きれいな胴をしている「イネマンジョ」といった。ヤンマの雄である。母親の実家の前に廃工場になったデンブン工場があり、そのデンブンを取った後の残物を貯める為、大きなコンクリートに囲まれた場所があった。夕刻になるとこの溜池の周囲に雌を交えたヤンマが集まり飛び交っていた。翌日にトンボ採りをするために、七夕に使うような笹のついた竹を持って行き雌を捕まえ

るのだ。葉だけを除き、小枝のたくさんついたまま振り回して、羽が壊れないように、絡ませるようにして捕まえる。雌は雄と異なり黄緑色なので判る。虫かごに翌日まで保管しておく。その雌の羽と羽の間を糸で結び、もう一方の糸の端を短い竹竿の先に結び、稲穂が出始めている田んぼのあぜ道に隠れて振り回す。雌は糸に繋がられているので振り回されるように飛ぶ。雄やシマは田んぼの稲穂の上を区画に沿って飛び回っている。それを端の方から誘い出すという訳だ。なぜ区画内を飛んでいるんだろう？雌を見つけた雄は飛んできてその雌に絡みつきの、つがいになろうとする。ガサガサと音を立ててからみついてきた。そのこんがらった時を逃さずあぜ道上に引き下ろし手で捕まえる。うまく採れないとつがいになってしまつて竿の先で、糸のついたまま飛んでいる。この方法で何匹でも釣れた。トンボ採りが終わり、夕刻になると今度は蛍採りである。カボチャの茎に入れて光らせたり、蚊帳の中に放して暗い中で光らせ楽しんでいた。

#### バタリと鳥モチ

小鳥を捕まえる為の道具である。材料は直径三センチ程度の竹竿、藤蔓、



網と網の枠にする長さ五十センチ直径二ミリ位の太い針金、そしてたこ糸を用意する。竹を弓なりに反らせて藤蔓二本で弓の弦にする。針金をコの字型に折り曲げ、網の周囲を通し四角い捕獲網を作る。弓の弦中央部に網の元になる針金両端を挟み込み、コの部分を持ち、ねじって藤蔓を燃る。燃られた藤蔓のバネ性を利用するのだ。反転し針金のコの部分が弓に当たり止まるように燃る。弓の中央部に糸を結び、糸の先にかぎ状の引っかけ物を付け、ねじった網の針金部分に引っかける。これを雀の来そうな所に、杭で固定、セツトする。網が反転し、雀が網の中に入るような位置を見計らって、稲穂など餌をひっかけ糸に結んでおく。これに雀がつついた時、引っかけがはずれて網が反動、パタリと反転し、雀が捕まるといふ具合である。大概は空振りが終わるが、時には雀が網を囲む針金に挟まれ、みじめな死に方をする場合があった。また弓を固定する止め杭が外れて失敗に終わるケースも多かった。子供作る毬だからね。

水のない冬の田んぼに雪が積もる。一面雪景色。遠くまで雪景色である。あぜ道が所々高くなって、枯れた草が黒い陰を作る。雪面には日が当たり耀いている。そのあぜ道の斜面の雪を払いのけ、黒い土が顔を出したところに

稲の穂をばら撒く。そこに鳥モチを付けた竹串を斜めに刺しておく。(一平方メートル程度)そのまま家に帰り、数時間後に見に来る。運が良ければ雀や田ヒバリが降りてきて、鳥モチの付いた串に絡みつき飛べなくなっている。一度に数羽も獲れたものだ。バタバタと暴れるが羽に串が絡み付き飛べない。ナンキン袋に入れ持ち帰った。当時は可哀想という意識は無かった。当然の獲物に嬉々としていた。

この鳥モチは市販されていたけれど自作もした。長兵衛どんの庭にモチの木があつて、その木の皮を剥ぎ、水に浸けて腐らした後、練って、粘りけのある鳥モチを作る。真竹の太いところを十五、二十センチ位に切り、割って細い竹串を沢山作る。できるだけ細く作り、その先四、五センチ位のところにモチを暖めて塗る。竹串の先がネバネバするように。これを並べ刺したのだ。小鳥用の鳥かごは幾つか有った。親父が好きでヒバリやメジロなどを飼っていた。そんな状況でメジロを捕まえに山に行く。結局捕まえたことは無かったけれど、人の話では、メジロが鳥モチを塗りつけた枝に止まると、くると逆さに枝にぶら下がるのだとか。

竹林に数百羽群がりピーピーざわざわ賑やかである。集団は田ヒバリか？あるいは椋鳥か？雀は大きな集団にならないと思う。冬の竹林は葉が少なく、歩きやすい。パチンコでその下から狙うのである。葉が積もりカサカサと音がしてしまふ。下から上を覗けば小鳥が囁ずり、一斉に飛び立つ様は心地よい。時にはヤマ鳩が来るので狙うけど、落

とした経験はない。空気銃を持つ大人はこれを狙った。高校生も家から持ち出していた。積もった笹の下には蛇が冬眠している。タケノコを探すと何度も遭遇したんだ。蛇はこの本には度々登場する：嫌いなのだ。

同じ冬から春にかけて、大人達はカスミ網を田の畦などに張り、カモを含めて多くの野鳥を捕まえていた。網が禁止になる寸前の事である。向かいの家が猟師でカスミ網を使って鳥を捕まえていた。時には、鴨を頂

向かいの家の息子は祭笛が上手で自分も習いたいと思っていたのだが年が離れすぎていたせいかなかなか親しくなれず、教えて貰えなかったな。そういえば楽器は木琴とカスタネットしかない。学校で買わされた。学校もオルガンであった。ギターが欲しかったが？。



く。これらの鳥を焼き鳥や鴨鍋にして食べた。血抜きした後、熱湯をかける  
と羽がむしれる。細かい羽毛はわら束を燃やしその上にかざす。燃えてき  
いになる。にわたりの処理と同じ方法である。散弾銃である猟銃で獲った  
のも頂いたことがあるが、細かい鉛の玉は食べても、排便の時、尻から出  
るからかまわないと言われたが？イタチの捕獲にもワナを使つてた。余談だが、  
そのワナを借りてネズミを捕まえたりもした。ネズミ獲りは他にも市販の物  
があり、捕まえたネズミの尻尾を切り取り学校へ持って行くとなにがしかの  
お金を貰うんだ。伝染病予防の啓蒙策であつたのだろう。また向かいの  
家にはウケが沢山あり、お古を貰つてドジョウを捕ったりする。親父がこの  
ウケを竹細工で作つた。その真似をしてウケ作りをしたが上手くできない。

### 掻い捕り

時期は稲の刈り入れ準備のため水を抜く夏から秋。沼地のくぼみに集まる  
ウナギ、雷魚を捕る。また貯留池（堰き）の水も抜くので、古くなった背負  
い籠の底を抜いたもの、あるいは大きなザルの底を抜いたものを持って、逃  
げ回る鯉や雷魚など大型の魚に被せて捕まえる。水路の水も少なくなるので、

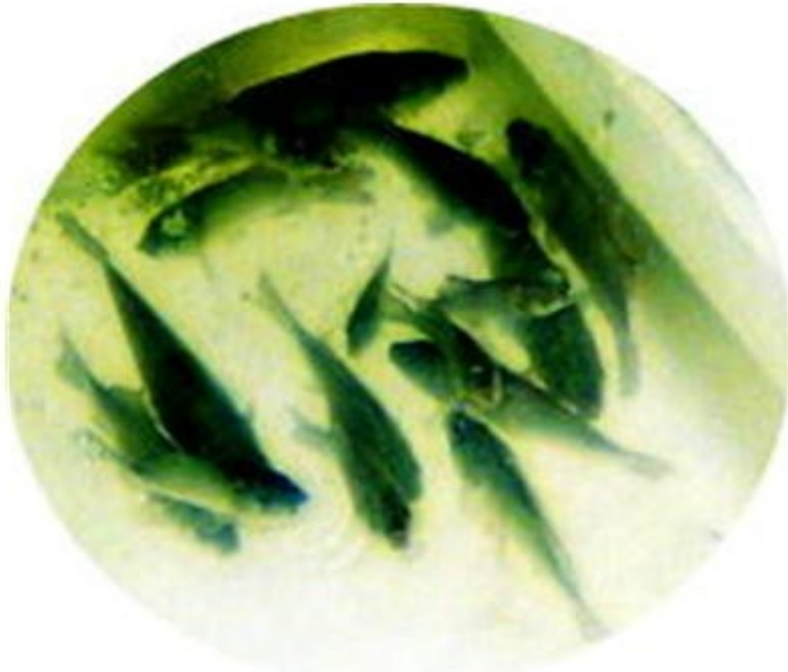


水路の途中に水溜まりが出来る。子供達はその両端に土手を作り、下手に向かってバケツで水を掻き出す。フナや鯰の子、雷魚の子、ソーメン子（ウナギの子）などがピチャッピチャッ、くねくねと泥の中に残る。時には大物も。沢山捕れるのも面白いが何時も捕れる訳ではない。捕ろうとして泥まみれになり追いかけたり、いそうな場所を探すのが面白い。

### フナ釣り

魚釣りはよくやったな。投げ棹は無い、振り出し棹も無い。親父のお古を買った糺（はら）ぎ足し棹である。近くの竹山から篠竹を切り出し、枝を払い、コンロで曲がりを修正、一本棹を作る。これは何本も持っていた。

釣り場の川の幅は二メートル程度、深さも五十センチ程度、川というより水路で、子供にとつては川。パンツ一つになって泳いだり、水を掻き出して魚を捕まえたり、三角網を引



いたり、水の多いときには釣りであつたりの遊び場であつた。兩岸はリヤカ  
ーが通れる程度の農道であるが立派な通学路でもある。コンクリートU字溝  
では無いから緩やかな傾斜の土手である。危険は危険であつたが今ほどでは  
無い。

餌はもつぱらミミズである。ミミズは台所から出る流し台の排水溝を掘れ  
ば、紅く手頃なミミズが何時でも手にはいる。獲物入れはバケツ。木綿糸に  
カラシ浮き、薄い鉛板を巻いてオモリとし、針を付ける。自転車の空気入れ  
部のゴム管がウキを差し込むのにちょうど良い。この針付き糸を釣り竿に巻  
付け、釣りに出かける。

梅雨の雨降るなか、学校から帰ったら出かける。中沼という場所近く、こ  
こに我が家の田んぼがある。この田んぼに沿った川で大きなフナがよく釣れ  
る事が多かったが、梅雨時はあぜ道に水が被り見えず、危険ではある。長靴  
の中に水が入り、歩く度にポチャッポチャッと音がする。しかも傘を差しな  
がらの釣り。川のへりにしゃがみ込んで糸をたれる。母親が田んぼの見廻り  
に来た。たぶん心配で見廻りにかこつけ様子見に来たのかもしれないけれど。  
結局は何も釣れない。帰るしか仕方ない。ぼつの悪さが残る。時にはソーメ

ン子も釣れる、竹筒等を放り込んであつた川であつた。

学校歸りの途中にある豊田川には自転車で行く。比較的大きな本格的な川で、鯉、ナマズなど大物狙い。深い淀みもあり、最初は親父に連れられて釣り場所を知る。学校歸りに遠回りして、釣れそうな場所を下見、次に来る場所を決めておく。時期により水量が変わるから釣れそうな場所も変わる。鯉など大きいと小さい針ではハリスが切れて釣り落とす。だからといって大きい針にすれば小ブナは釣れない。ひたすら待ち時間が長くなる。

遠出をして、南白亀川（なばきがわ）まで釣りに出かけた。ここは海に近く、自転車で一時間近くかかる、大きな川であまり上手く釣れない。棒が短か過ぎたのであろう。ハヤというスズキの子であるが、これはミミズでは釣れなかった。ゴカイという餌を捕る方法をしなかったからだ。大人が川の浅瀬に入り何か捕っているのは判っていたのだが。時々鯉や鰯も釣れるものだから、出かけた。行つてはオケラの事が多かったのだけれど。ウナギを捕まえるに、大人は夜間に置きバリをしかけてた。えさはドジョウ。ウナギはドジョウを食べるのである。釣れたウナギの姿は見るに耐えられない場合がある。逃げようとして糸にからまり、自らの体を締め付け傷つける。この方



法はやりたくない。

### ドジョウを捕まえる

六月、苗が活着して二十センチ程度になると、夜間、稲株と稲株の間にドジョウが伸びて寝ている。正確には水底にである。針を直線上に数十本並べた「ドジョウ打ち針」という物があつた。親父が夕刻にカーバイドのカンテ



ラとドジョウ打ち針を持ち出し、カンテラに火を付ける。バケツを持った私が後ろからついて行く。田んぼのあぜ道は細い。落ちないように長靴を履いてついでに行く。深さは十センチ程度であるからカンテラに照され、澄んだ水底がよく見える。ドジョウと十文字になるよう水面からドジョウめがけて叩き下ろす。針に刺さったドジョウを、私が持つバケツのへりに、針を押さえている根元を叩いてドジョウだけバケツの中

落とす。百匹程度捕れば大漁、針に刺さる程の太いドジョウであるから充分である。暗い夜の水面に、カンテラに照された寝ているドジョウの姿は、今も想いだしながら、懐かしく思う。

ウケ（胴）を仕掛けて捕る。これは梅雨時期から水を干すまでの夏にかけてである。また台風などで水かさが増した時などが狙いであった。田んぼと田んぼの間にあるあぜ道を切って、隣の田んぼに水が流れるようにしてある。

その所にウケを置いて、流れ下るあるいは上るドジョウを捕まえた。流れの逆向きに置くか、順向きに置くか腕の見せ所で、雨の状況、ドジョウの動く方向を見定めて置くのである。翌朝、バケツを持ってドジョウの収穫に行く。特に雷が鳴り雨の多く降った夜は沢山のドジョウが捕れる。時にザリガニや小鰭も入っている。

網で掬うことも楽しみであった。三角網に引き棒をつけたブツテという物を親父が



作った。雨上がりにそのブツテとバケツを持って水路に出かける。獲物の居  
そうな場所は濁りの微妙な違いで判る。小川の兩岸に長くなった草が垂れ込  
んだり、ゴミが底に引っ掛かっていたり、そのような場所は、淀みが出来て  
いる。水が濁っていけば最高の漁場である。その向こうにブツテを放り込み  
手前に引く。ゴミや草と一緒に。引き上げ、水の中で左右上下に振って泥を  
洗い流す。ジイツと網の中を覗きこみ、ドジョウや鰻が、他の小魚やザリガ  
ニがいないかを探す。土手に、器用に網の中の物を放り出す。ドジョウがに  
よろによる、鰻がバタバタ、ザリガニは親づめを振り上げながら後づ去りし  
ている。大漁である。バケツからザリガニが這い出したり、鯉っ子の大きな  
物は跳ねて飛び出したり、いやはや楽しいものだ。太いドジョウが一番の狙  
いで、味噌汁の具である。こうは書くが空振りも多いのも事実だが。

捕ってきたドジョウは洗ってバケツの底に一晚放置する。水はほとんど要  
らない。ドジョウ同士が擦りあって泥が取れる。また腹の中の泥も吐く。こ  
うしないと臭いし。ドジョウを長く生かす為にもこの方法が良い。それから、  
鰻などもそうであるが、捕ってきたら必ず綺麗な水に、二、三日放置して泥  
を吐かす。よく寒ブナが良いとは、冬時期はあまり餌を食べないから腹の中



の泥も少ないからであろう。

稲刈りが終わり、秋から初冬にかけては、田んぼの湿り気のあるところや水路の湿り気のあるところを掘って、土の中に潜っているドジョウを捕まえる。土底の表面に小さな穴が開いているから、そこが狙い目であった。たぶんドジョウの空気孔だろう。現在ドジョウは絶滅危惧種だそうだ。明らかに農業のせいだ。(羽生淡水魚水族館で聞いてみたが)ドジョウの生態は判っていないらしく、人工的には幼魚を誕生させられないらしい。ナマズや雷魚も見なくなったが？

### ザリガニを釣る

さらに雨が降り、田んぼの稲苗の葉先が見えるか見えなくなるほどに水かさが増すと、カエルを捕まえ、足を持って地面に叩きつけ気絶させる。両足をびーんと伸ばすので皮を足さきから剥き頭を覆う。踏みつけて内臓物を出し、足を糸の先に結んで、一メートル位の細い竹の棒に糸のもう片方を結ぶ。こうしないと餌になるカエルが水中に沈まない。これがザリガニを釣る釣り竿である。今の時代では残酷と言われ反対する親が出てくるであろう。

学校でもカエルの解剖をしていた。電池の電極にリード線を付けその先を心臓や筋肉に当ててびくびくさせていたのだから、まーいいか。今やろうとしたら残酷さを感じて出来ないだろうな。年齢と共に残酷さの意識は変わるのだ。

数本の竿を作る。田んぼのあぜ道にしゃがみ込み、竿をあぜ道に突き刺してザリガニがカエルに数匹食らいつくのを待ち、引き寄せてたま網ですくい捕る。ザリガニは尻尾を使い後方に勢いよく逃げる。後ろに引っ張るのが得意なのである。前には、いざりながら進む。だから餌にいざり寄り食らいつくつと、餌を取り去ろうとして、後方に勢いよく引っ張る。この様子で竿が揺れザリガニのかかっている状況が判る。何匹も食らいついていればアッチに行ったりコッチに引っ張ったり。この時が狙い目で竿を立ち上げ網で掬い捕る。たま網を手前下から挿

#### カエル

少なくとも雨蛙やガマガエルではない。小さくなかったし吸盤も付いてはいなかった。オシッコをかけられる事も無い。ツブツブのあるカエルでもない。お腹に白黒の斑点のある大きな食用蛙とも違う。背は緑と茶の色模様、お腹は白い。調べればトノサマガエルだったかも知れぬ。絶滅危惧種だそうだ。卵はゼリー状、田んぼの藻の下や中に、チューブから出したとぐる巻のような中に黒い粒々。動き出してオタマジャクシが群れる。

捕ったザリガニの食べ方を説明しよう。赤く大きな物は先ず良く洗い、茹でる。尻尾を引き剥がして胴側の味噌を吸う。尻尾の殻をとり腸を取り去り食べる。親爪の肉も。余れば、剥き身にして、味噌砂糖を加えてさらに甘く煮返す。これは美味しいよ。殻は鶏のえさにした。赤くない小さいザリガニは、まな板の上でたたいて味噌と砂糖、油で炒めて、エビガニ味噌にした。ザリガニをエビガニと称していたのだ。

バケツが満杯になるほど捕れた。

水かさを増した田んぼ、隣との境あぜ道は所々水が被る。静かな風にさざ波がパチャリパチャリと打ち寄せる。さざ波の向こうにカエルが顔を出す。その蛙を狙うのであるうか、よく泳ぐ蛇に遭遇する。あまりに水量が多く、あぜ道の境目が判らなくなるほどになると目の焦点が定まらなく、目眩がして田んぼに落ちたりしてからかわられる。このような風景、今では遭遇できない。

この頃まだ農業は無かったので、またザリガニは稲茎を食いちぎる害虫で

入するのである。ザリガニは逃げようとするが欲張りでか、仲間に取られないようにするのか、エサを引きずり下がろうとする。必然で餌は水の中で浮き上がる。その下に網を入れるのは楽なものだ。逃げるザリガニの何匹かは網を逃れるが、次から次へといざつてきて食らいつく。数本の竿を出すのだからいとも忙しいザリガニ釣りである。

あつたから大人も喜んで参加した。スルメイカなども餌に使つたが蛙餌には及ばない。餌がなくなつた時は、ザリガニの尻尾をむき身にして餌にする。ザリガニは共食いなのである。カエルだつてザリガニのむき身を餌とし、浮かぶ口元に近づければパクつと食らいついてくる。餌の補充が現場で出来た。ちなみにザリガニは尻尾とお腹の部分に卵を抱えこむ。薄い青紫の卵塊である。脱皮したばかりの柔らかい体はいとも頼りない。脱皮している場面も見ることが無い。その殻も見当たらない。なぜだろう？どうも自分で食べてしまつて残らないのかも？

高学年頃、ザリガニ退治に田植えの前に石灰窒素を撒くようになり、灰色に青の混じつた膜が水面に浮かぶ。その波間に惨たらしく茶色に変色したザリガニの屍、白い腹を見せあぜ道近くに吹き寄せられ浮かぶドジョウ。子供の目にもこの田んぼは駄目だなーと映る。夏の田んぼはトンボ採りであつたが、これもホリドールとかパラチオンとか散布するようになって、これも駄目になつた。



## 夏の田んぼ

田んぼの水を干して稲を育てる時期がある。そのとき低いところに水溜りが残り、その水溜りにウナギやフナが寄り集まる。今ほど耕地整理が進んでいなかったもので起伏があった。特に沼地の田んぼなどが狙い目であった。網や罾鎌を持って捕まえに行く。稲株を避けながらであるが、これが面白かった。田んぼの貝だから「タンケ」と称する、子供のこぶし大の黒く比較的大きな貝（カラスガイ？）が足の先に引っかかる 때가 あった。この貝を七輪で焼き醤油を垂らして食べたが、固くて不味くて。ナマズや雷魚も捕まえるには大きく、暴れて面白かったが、食べるとなると美味しい感じはしない。それに引き替えタニシはよく拾って、楊子で身を取り出し、甘辛く煮て食べた。弁当のおかずにもなっていた。ドジョウと同じように田んぼの水底に転がっていたのである。「タツボ」と言う。田んぼには、食べられなかったが、メダカはもちろんタガメやミズスマシもいた。ハヤ（アブラハヤ）と言った小魚も多かった。これは食べると苦い。田んぼは手伝いの場所ではあるが同時に、子供の遊び場所、漁の場所である。捕まえるものの宝庫であった。



## 山狩りの探検

三角網に長い柄を付けたブツテを担いで冬の隣村へ探検。子供にとっては探検である。また裏が山で、山といっても十メートル程度の高さだが、子供にとつては山である。その山と山の谷間に、田んぼが奥の方まで続いている。その真ん中を水路が流れ出ていた。山合いであるから冷たく氷って、その水溜りにフナがいた。寒フナが美味しいと言って、捕まえに行く。氷を割って網を投げて引くを繰り返す。何匹かが捕れる。夕飯のおかずにする場合もあるが、大概は母親に面倒がられた。捕りに行くのが楽しみだったのだ。もちろん一人よ、一人でだよ。

ある早春には、爽やかな風と誰もいない冒険心でその山道を歩き回った事がある。素焼きの仏像の駒を拾った。大人になるまで大事に取ってあった。後で知った事だが、江戸時代のメンコ（面子）であつたようだ。当時のメンコは素焼きの図形物であつたと骨董品の番組「何でも鑑定団」で紹介していた。一個百円位の値であつたが……。今はもうない。息子のオモチヤになり何処かに無くしてしまつたようだ。



## 七・作る

作る作業には小刀が必需品、皆が持っていた。ナマクラというヘナヘナな小刀であつたが売られていた。男の子たちはこれで竹や木の枝を加工した。鉛筆もこの小刀で削る。鉛筆削りなぞ無かつたから学校へ持って行って良かったのである。もちろん使い捨てのカッターナイフも無かつたのだ。規制は無かつたよ。この小刀を砥石で研いで切れ味を良くしたりする。

小刀と竹で豆鉄砲や紙鉄砲、杉鉄砲など作る。竹とんぼやパチンコ、呼び笛、釣り竿だつて作つた。他にもある。空き缶を利用したぼっくりや竹を加工して竹馬を作つた。大物はそう何回も作つた訳ではないがやって見たということだろう。親に作つて貰つた物を思い出しながら作つていた。さらに風を作る、ゴム駆動の模型飛行機を作る、鳥を捕まえるバタリを作る、またコマの心棒を作る、糸巻き戦車を作るなどなど、いろいろなものに使つたのだ。小刀を使うことを楽しんだのだろう。延長上にキリやノコギリ、カンナなども興味あり使っている。使うだけでなくノコギリの目立て、小刀やカンナの刃を研いだり、鎌も自分で研いだ。ウサギの餌に草刈りをしたり、稲刈りも手伝つたのだから、必然である。だからといって子供たちを傷つけたりはし



なかった。振り回すことの危険性は良く知っていたと思う。応用知識も豊かになった。自分の指を切ったことは何度もあったが、たいした傷ではない。赤チンや血止め草をつけ、手ぬぐいの端を切って縛り付ければ、傷の手当てはおしまい。勿論自分で、片方の手と口とを使って縛った。その指を底いな

がら小刀を使う。

竹鉄砲や笛の材料になる竹の在りかは川の土手か竹林。この竹林の外側の一部が竹やぶになっていた。お互いは住み分けているようだ。竹やぶは密集して生えていて中に入れない。小さい体を竹やぶの中に割り込ませるようにして、数ミリの手頃な太さの物を切り出す。竹林には太い真竹がある。水鉄砲や竹馬の材料である。こちらは切り出すのにノコギリが必要になる。竹と竹の間隔があり、中に入りやすい。タケノコも採れた。伸びきったタケノコは水鉄砲など



悪戯工作に都合がよい。近くに無かったが布袋竹の瘤は欲しくてしかたなかったな――もちろん木の枝も加工の対象であった。丈夫で加工し易いのはドングリや椎の木の枝、その生木であった。しかし圧倒的に竹の方が加工に適していたのであろう。

### 鉄砲いろいろ

弾にする豆は南天の実を使ったが、杉鉄砲や紙鉄砲は説明が必要かもしれない。杉の実はいさい。相当する竹の太さを選び作る。実は油分が多いので筒の中をよく遮蔽する。空気圧縮が優れ音も勢いも強く、顔に当たると痛い。紙鉄砲はその都度、口でグチャグチャと噛んで唾液を含ませ弾を作る。こうしないと竹筒の中を滑らないし、空気の圧縮も不十分になり玉として発射されない。紙の量が少ないとぐにやりと出てしまう。紙は新聞紙を千切って噛んだ。

作り方を説明しよう。篠竹の節間が長くまっすぐな部分を切り出し、節から五センチ位の所を、小刀で回し切りして切り落とす。この部分が、手で持ち押し出す部分になる。一方この竹の内径にちょうど差し込める太さの細竹

を選び、砲身になる長い方の竹筒に差し込む。細竹の全体の長さを、手持ち部分に差し込む長さを含めて、砲身すなわち太い竹の全長よりも一、二ミリ短く調整する。弾を砲身元に詰め、細い竹を差し込んで押し出せば、二個目からボンといって弾が飛び出す。

水鉄砲はもう少し太い真竹が必要になってくる。子供の、この小刀ではちよつと無理、切れない。だから伸びきった真竹のタケノコを使った。これなら小刀でも加工ができた。原理は紙鉄砲に同じだ。水を吸い込むピストンの部分には布を巻き付けて作る。押し出す手元も布を丸めて太くして差し込んだ。水を貯める太い部分、砲身は節を付けた状態で切り出す。その節にキリで小さな穴を開ける。パケツに水を入れて、ピストンで吸い込めば水が太い筒の部分に吸い込まれ、押し出せば勢いよく飛び出し、水鉄砲が完成する。うまく布を巻かないとすぐに外れてしまうので、糸でぐるぐる巻きにしたものだ。タケノコを上手に選ばないとすぐに壊れてしまう。柔らか過ぎるのである。鉄砲では無いが飛び道具として、木の又とゴム紐を利用してパチンコを作り雀を狙う。勿論市販もあったが。輪ゴムを指で弾いて飛ばすなども覚えて、いたずらをする



## 糸巻き戦車

裁縫に使う糸は糸車に巻かれていた。糸を使い終わった糸車は不要で裁縫箱の中にいくつも転がっていた。この糸車の両輪をギザギザに加工する。マッチ棒に輪ゴムを絡ませ、真ん中の開いている穴に輪ゴムを通す。反対側に出てきた輪ゴムに短く折ったマッチ棒を絡ませる。ぐるぐると撚るように巻き、巻かれたゴムの回復力により、また長いマッチ棒の片側が支点になって糸車を回転させる。短いもう片方のマッチ棒は空回りしないよう、糸車の車輪の面に切り込みを入れ、ストッパーにする。誰に教えてもらったのか覚えていないが（たぶん親父）何個か作って向かい合わせて押し合った。カブトムシの角に結びつけて綱引きをさせたり遊ぶ。回転軸になるマッチ棒が当たる面には滑りやすく、回転しやすいようにローソクの蠟を塗り工夫をした。戦車ごっこである。

## 竹とんぼ

真竹を貫ってきて、太い部分を立てに割る。さらにプロペラになる長さに切り、その幅に割り裂く。皮側の中央に鋸でX印に切れ目をつけ、交点にキ



りで割れないように穴を開ける。その皮側に、穴を中心に左右三ミリほど離し、互い違い斜めに鋸を入れ、プロペラになるように、かつ傾斜を付けた羽になるように割り取る。小刀で羽をきれいに調整すれば竹とんぼの羽が仕上がる。軸は残った竹を三ミリ□に割る。角を削り落として手で揉み回せるようにする。先を少し細く削りプロペラの中央部の穴に差し込む。これで完成。プロペラだけが飛び出るように、差し込む穴を二個にして、軸を二軸にした。りした。

### 釣り竿作り

親父が釣りを好きで、折れて中途半端に残った竿の一部が何本か有った。適当に組み合わせ一本の竿に仕立てて使う。当時は振り出し竿ではなく、短い部分を継なぎ合わせる継ぎ竿であつたから、途中が折れたら他の部分と合うものを探せば良かった。無ければその部分を作るだけのこと。継ぎ目は補強するために糸で巻けば良い。その部分にエナメルを塗って図形化する。時には竹藪から篠竹を切り出し一本竿を作る。新しい竹は駄目、二、三年経た丈夫そうな竹を選ぶ。そのコツは下の方の幼皮が残っておらず、かつ、くす



んだ濃い緑色をした物を選ぶ。しかも曲がりの少ない物を。曲がりは炎に当たってまっすぐにする。これくらいのは小学生でもやっていた。さすがに放置して枯らすところまではしなかったが。吊り糸は木綿糸である。餌はミミズ。鰻を捕る置きバリなどは風糸を使う。

### 編む・綯う

ざるの編み方は小学校で工作の時間でも教えられている。竹加工も好きだった親父のせいか、竹簍の作り方、太い竹の回し切り、枝落としの方法など「竹割り」を使うことを覚えた。竹割りは古い軍刀を途中から折った物であった。「木元竹ウラ」などの言葉も覚えた。割りやすい方向の事だ。女の子も授業で、お手玉を作ったり刺繍をしたりする。編み針やハサミ、縫い針を使って裁縫をしていたのだから器用なものだ。

編むと言えば虫かごは麦わらを編んで作ったな。



魚を捕る網は自分でも編んだ。道具の手構も小刀と竹で手作りだ。織るほうでは紙飛行機だ。楓の葉でコインやおはじきを織る。竹の葉で笹舟など織り浮かべて遊ぶ。クローバーの花をたくさん摘んで花輪を編み妹たちを喜ばすなぞはお手の物。枯れたクローバーの花を束ね、相手の花の部分にぶつつけて千切りっこをしたものだ。

小遣い稼ぎに縄を拘う。稲藁の束から長く善いものを選びすぐり、水に濡らし、木槌で叩いて柔らかくする。これを手で拘って縄縄にする。売るには足踏み機械で拘って太鼓状にする。母親は筵も作っていた。これも足踏みだった筵織り機にかけて織る。この材料に選りすぐった稲藁が必要であったから、手伝いをしたんだ。子供の力では締め付けが足らないので筵は作れなかった。コマ回しの綱、たこ揚げの糸なども、麻で縄を拘って作る。風糸は売られていたが自作にこだわり自分で拘う。

縄を拘う手順を紹介しよう。相撲の横綱が使用する綱の綱打ちの映像を思い出すと良い。拘い始める、その時の初めの動作や途中の手と指の動きなどを思い起こしながら書いてみる。選りすぐられた六本の藁を手にとり元を結ぶ。最初に足の親指と薬指の間に結び目を挟み固定する。三本ずつ右手と左

手に別けて持つ。左右の手に持った藁が回転するように撚りながら、藁を持ちかえる。その繰り返しを五回ほど繰り返す。ほどけないように両手の平でくるくる擦り慣らす。片方の手は次の二本の藁をつかみ、撚られている縄の股に挟み、縛う作業を繰り返す。五回ほど縛ったところで更に次の二本の藁をつかみ、再度撚られている反対側の藁に足して縄の股に挟み、縛う作業を続ける。何度か繰り返して長くなったところで、最初の結び目を尻の下に移動して固定をする。次々と縛う作業、藁の追加をして、目標とする均一な太さになるように、連続して縛ってゆく。手前が長くなって縛う位置が高くなるので、できた縄を尻の後ろに引き、縛う位置が自分に合うところに来るようにする。繰り返した結果、数十メートル出来上がった縄を擦り強いて余分な藁くずを取る。また突き出た藁の根本はハサミで切り短くする。最後は両手を広げた長さに計り、両端を左手に合わせて輪を作る。これを繰り返し左手に持ちきれぬ程度に束ねて終了。保管し縄として農作業に使った。子供のすること、所どころに細い部分や切れやすいところがあつたりして笑いの種にされる。それでも役立ったのである。

縄を縛う機械を買い入れて、縄の太鼓を作ったのはまだその後の話。面



白かったのであろう。小屋の軒下に機械が置いてあった。雨の日などは遊べない。それ故、積極的に縄を拘ったんだ。農家の男達は筵を二つ折りに閉じて「かます」という糊の入れ物を作る。この縫い糸に細縄を使った。藁と細縄を使って米俵を作る。それを閉じる蓋を作るなどもしていた。草鞋も作る人がいた。しかし当時は下駄と雪駄が主流だったから、自分は買ってきたよ。だから下駄屋にも鼻緒を買いに良く行った。そこでは。何か知らないが店の親父さんが下駄の板を磨いている。ついでにそれを見ていた。鼻緒が切れれば手拭いをちぎって下駄の穴に差し込み、鼻緒を縫く。穴に入りにくいから、燃りながら唾を付けねじ込むようにしてた。雪駄はゴム製であったから切れれば捨てるしかない。自分で修理出来ない。

#### 八・採る

##### 採って食べる

カイコを買って来て机の引き出しで羽化させた。卵が引き出しに産み付けられ、幼虫からサナギにな



るまで飼う。蚕の餌は桑の葉である。桑の木が至るところにあってその実を口に含んだ。ドドメと言ったな。グミ、榎の実が家の庭にあった。熟したものを摘まんで食べる。

アケビ、山栗、椎の実近くの林や堀の脇に自然木があるのを知っていて、毎年秋になると木に登り採取した。もちろん私有地の木であったが咎められる事はない。栗や椎の実が母親に炒ってもらい、同じく炒った落花生や大豆と一緒に混ぜこぜに小袋に入れ、持ち歩いて食べている。炮烙があつて落花生など炒るのに使っていた。

柿、ミカン、びわの木も庭にある。梅の木もあった。これを食べたな。買うことはない。青梅は青酸あり「食べないように」と児童会で決まったりしたが、酔っぱくて美味しいのでたびたび食べている。熟すとあまりお美味しくない。梅干を作る。紫蘇の



葉にくるみ、漬ける。梅酢は大根を赤漬けにする。この赤漬けは好きであった。

梅の木には毛虫がいっぱい付き閉口したな。この毛虫退治をする為に、竹の先に布を巻き、油をつけて燃やし、毛虫を焼き落とした。毒虫と言えばムカデである。「はがち」と言った。雑巾の中にいて刺された事がある。腫れて非常に痛い。



朝、すばみゆく  
カラスウリの花

#### 薬草を採る

クチナシの実は塗料としてコマに塗った。打ち身に良いと言われ、またスーと感じて気持ち良いので足にもよく塗った。むしろ足の脛が黄色になるのでそれが面白かったのかもしれない。カラスウリも色づいた実を手足に塗った。黄色になるからかも。しもやけに効くと聞いたが？オオバコ、ドクダミも薬草と聞いていた。しかし、利用した記憶はない。オオバコはウサギの





餌によく採取した。ゲンノシヨウコが豊田川の土手に生えていた。浜宿のお婆ちゃんに連れられ採取に行く。お婆ちゃんはわざわざ採取に出て来ていたのだ。乾して腹痛の薬にする。血止め草は葉を揉んで傷口にくっつけた。俗称蛇イチゴと言う。どちらが俗称なのか？逆かな？茶は生け垣の茶葉を摘み、農学校に持ち込んだ。新茶に仕立ててくれる。

#### 山菜を採る

茂原には飛行場跡があった。円体壕も幾つか残る。飛行機の格納庫である。滑走路には壊れた戦車が放置してあり、油の付着した、何か判からぬ部品が散乱していて、拾って持ち帰りオモチヤにしていた。滑走路の両脇に子供の背丈ほどの水路がありこの水路には比較的大きなフナや鯉がいた。当時この滑走路を利用してオートレースが行われた。見にいった記憶である。今考えると戦後間もないと



いうにそのような大会が行われていたのだ。

ワラビ、ゼンマイはこの飛行場跡近くの林に出ていた。芹は近くの湿った田んぼにありこれを採取。キノコも同様で、滑走路と滑走路の間の松林にキノコが生えていた。キノコ採りにも行ったがどれがどれだかよく覚えていない。シメジとか松茸。これくらいしか判からなかった。一人で行くのではなく、キノコを知る友と行くので教えられるままに採取。ただし毒キノコを心配して採って来ても食べた記憶はない、むしろ途中で自然木に登って生薬を齧った。この味は忘れられない。

## 九・祭り

### ヤリカンカー

この祭りには小学生以下の子供たちが集まった。正月、七日が過ぎると、門松を処分する。その握りやすい太さのところを切り、皮を削って太鼓のバチ様なものを作る。子供たちは各自二本ないし一本、それを持って当番の家に行く。順送りに決まっている当番の家は、土間に、太く長い丸太を横に吊しておく。その両脇に子供たちが座り、持参したバチで丸太を叩き合うので





ある。十人位集まるであろうか。そのときの歌、かけ声が  
ヤリカンカー スリカンカー スツテモスラネモ ナマ  
ミソダー ナマミ ソダー。ミツチヨト コーボガ ショ  
ウベンシテ グチャグチャダー グ チャグチャダー  
と言って笑い合うのである。当番の家は暖かい食べ物や餅  
を用意し、子供たちはそれを食べ食べ、叩きながら笑い転  
げる。寒い正月のこと、土間には焚き火などする家もあり  
絵になる。「ミツチヨ ト コーボ」は南部のグループの  
ガキ大将のあだ名、その子たちをけなすことで笑い合う。今ならイジメとし  
て教育委員会に取り上げられそうだ。南部は南部で同様の集まりである。

### 天神さま

天神さまの周りは竹やぶで、村北側の中程にあり、道路から少し奥まった  
所にあった。普段、神社までは行かない。そこで遊ぶ事もない。しかしこの  
時は、中学三年生までの子供たちがこの社に集まり、食べ物を持ち寄り一泊  
する。その減多に行かない場所で一夜を明かすのだから、みんな戦々恐々。

社に土俵があり昼間は相撲や広域鬼ごっこをして遊んだ。

午後になると社から七福神を取り出し、小学生以下の、すなわち下っ端の子供たちが、この七福神を持って村をねり歩く。家から家をまわるのだが、農家ゆえに庭が広い。大概は隣家との往き来に隠れ近道がある。子供たちはその道を通りまわる。その近道は木が覆い被さっていたり、境溝に細い木の橋が掛かっていたり、そこを「天神さまが舞い込んだー」「福の神が舞い込んだー」と声を張りながら一軒一軒まわる。お小遣いとお菓子や何やらを貰ってまわる。お小遣いは夕飯の買い出しに使ったり、明くる日余ったお小遣いを、子供たちで分け合ったりしたものだ。時期は秋の収穫が終わった頃だったかなー、ミカンがなっていて、悪ガキはそのミカンを失敬したりしたんだから。定かでない記憶である。

中学生はその社で一晩明かすため、布団を持ち込んだり、夕飯の準備をしたりに忙しい。食べ終わり、小学生を帰せば、夜に誰かが入って来ないよう、雨戸を内部から打ち付け固定して戸締まりをする。なにせ古い神社、ガタガタであったから。夜間に参加していない中学生や卒業した先輩達がからかい半分に襲ってきたり、泥ボーに入るからだが。キャーキャーわーわー大騒動



になる。からかい半分であるから大事になることは無い。また皆で騒ぐことは楽しい事であつた。

## 十・夏休み

### 母親の実家に

一年生の頃、すでに大人用自転車に乗れた。三角乗りから始まり中乗り、サドルに腰掛けて乗るのはまだ先である。茂原から母親の実家であつた南白亀（なばき）村浜宿へ、中乗り自転車で十数キロの田舎道をこいで行く。姉と一緒に事が多かったが一人で行く時もある。時にはチェーンが外れ、通るかかった人に助けられたりしたことも。母親の実家には爺ちゃん婆ちゃんがいて、夏休み中、泊まりに行っていた。暑い夏の真っ盛りに、途中に親父の故郷南吉田が在るが、寄らずに、まっすぐ母親の実家浜宿へ向かう。浜宿には従兄弟たちがいたので遊び相手がいる。豚小屋や広い庭、裏の畑にはスイカやまくわ瓜、トマトと美味しい物が植わっている。ほかにサトウキビやトウモロコシなどあり、嬉しさ尽きない。ましてお婆ちゃんと浜に行けるのだからこの上ない。従兄弟の母親の実家が、広い畑の向こう側にあり其処に



も従兄弟の従兄弟が居り、同い年で、この子たちともよく遊んだ。更に向こうには溜め池があり、ここでも魚を捕まえる事や、水浴びをしたり釣りができた。今なら危険な場所と見なされ「立ち入り禁止」の柵が設けられそうだった。

夏休み中浜宿で過ごした帰りに、叔父さんが馬車で送ってくれた事あり懐かしい。スイカを途中で割り、食べながら帰る。農作業用に馬も飼っていたのである。帰りに親父の実家にも寄った事がある。大概、親父と一緒に時だったから、墓参りである。教えられた歌が「仙座の宮山、じょうぼ」(入り口から境内までの小道)が長くてお化けが出そうだぞエー」どういう意味か知らぬ。前後の節を覚えていないので。

### 海水浴・ハマグリを採る

母親の実家から数キロ先の九十九里、浜宿海岸まで徒歩で約1時間、泳ぐ支度でトコトコと歩いて浜に行く。浮き袋にスイカやまくわ瓜、おにぎりなど弁当持参である。お婆ちゃん、従兄弟たちと一緒にいる。浜に近づけば浜の匂い(干ものの匂い)、潮風の匂い、波の音が聞こえてくる。浜の砂は熱く熱せられ雪駄では大変だった。砂浜を、片方の足の上にもう片方の足を乗

せ、熱さを逃げる草を探しながら、所どころに生えている浜草の上を飛び飛びで伝い波打ち際まで行く。そして水遊びの場所を探す。

場所を選ぶのにコツがある。波打ち際は一見同じ様に見えるが、引き潮は一定のところへ片寄るように引いて行く。ミオ（水脈）と言って潜伏した川状の流れがそこにある。そこで波に飲まれると沖の方に流されてしまう。その目印に、浜には鳥居を建ててある。船は出やすいのでその筋に船を置いてある場合が多かった。もし流されたらジタバタしないで流れに身を任せよと教えられた。黒潮の流れに乗り銚子沖で船に見つけられると聞いた。本当かどうかは判らぬ。そこから避けて場所を選び、筵を敷き、基地にする。水際で荷物を広げ置き、お婆ちゃんは腰を下ろして待っている。

波打ち際での遊びは楽しい。海水パンツなど無いから普通のパンツで、ゴムが水に浸ると伸びて脱げてしまったりする。泳ぐと言っても泳げない。腹這いになって波乗りである。砂を掘って山を作る。波がくるたびに崩されてしまうがそれがまた楽しい。遊び過ぎ、唇が青くなるほど寒くなったら砂浜に寝ころび暖まる。昼になればスイカやまくわ瓜を割り海水に浸けて食べるはまた美味しい。またいわゆる潮干狩りである。泳ぎ遊びの途中に、波に打

たれながら両足を揃えて後ろ向きに立ち、踵を支点に爪先を左右に動かして、後ずさりしながら砂を掘る。ゼンナやシオフキが浮き上がる。波が来れば引き潮に貝が逃げる。あわててそれを拾う。一方では貝が砂に潜り逃げようとする。

千もの匂う海岸をうろつき歩けば、打ち寄せられた貝殻や海草拾いなどもできた。その良さそうな物を探す。ヒトデの貝殻は星形で格好が良い。集めて夏の宿題の一つが片付く。海ホオズキなど見つければ口に含んでグーグーと鳴らす。これは海岸に打ち寄せられた海草の一種で、大きさ一センチ位、小さなバナナ状の、房になった物である。一個一個をもぎ取り、口に含み、穴の開いている方を歯ではさみ、舌で押し潰してグーグーと鳴らす。塩味がしてなかなか美味しかった。時には水辺に魚が、サバだったか泳ぐ。それを追いかけるが捕れるはずも無い。疲れば基地に座り込み残りのスイカで水分を補給、肩や顔は真っ赤に日焼けして、塩水に痛い。歩いて帰れば直ぐに水を被り改めて痛さが身に滲みる。



## シジミ刈り

浜宿の夏は暑い。二年生の頃だったか、南白亀（なばき）川に近所の中学生を先頭にし、従兄弟などと数人で自転車の後ろに乗り、シジミを採りに行った。川と言っても海に近い川口である。淡水と海水の混じり合う場所にシジミが沢山採れたのだ。所どころが砂地で、足で揉めばシジミが浮き出てきた。熊手などは使った記憶がない。このようなところは深いところ、浅いところ、凸凹が日々変わる。その深いところにはまってしまった。要するに溺れたのである。幸い中学生に抱き上げられて助けられた。浜辺で腹ばいの波乗りはできても泳げなかった。浜近くの中学生は泳ぎが達者である。直ぐに気付き、潜って下から抱き上げる。新前の子供を連れて来たので注意をしていたのだ。案ずるかなである。従兄弟はお婆ちゃんに事の次第を告げる。後でお婆ちゃんはその中学生の着物を縫い、作り上げ、お礼に俺を連れて行く。その人の家の前を通る度に思い出す。守さんといったかな。その家も代が変わって知る人がいない。





## お盆

息子の新盆である。子供の頃を思いだし想いだししながら盆飾りを作っている。子供時代のお盆のほとんどもを浜宿で迎えた。迎え盆に送り盆。家紋を入れた提灯を持って墓と寺に行く。盆飾りを作る手伝いはしなかったが、出来上がった盆棚はよく覚えていいる。母親の弟が戦死している事もある。丁寧な盆飾りであった。竹で灯籠を作る。太い部分を背丈に切る。三節ほど六つ割りにして割れが広がらないよう、リングを作って上下に嵌め込む。節目を利用し、中にサンを渡して広げる。このサン中央に釘を立て口ウソクを立てる心棒とする。灯籠は半紙を貼り灯りにする。葉付きの枝は、盆棚の両脇に立てる。茅の細縄を棚の周囲に巡らす。色紙を切って紙垂を垂らした。茅茅馬も作った。ガマの穂とほうずきを吊す。棚にはゴザを敷き、盆花とスイ



力やまくわ瓜、南瓜、トウモロコシなど供物をあげる。当時スイカは棚スイカと言ひ、畑に出来た一番大きく立派なものが選ばれていたのだ。

### 春休み

春の浜は、暖かい砂浜にうつらうつら、寝転ぶ。南に遙か大東岬を望み、北に銚子は見えない。引き上げられた船の先に砂浜のみが陽炎の向こうに霞む。馬蹄形磁石を持って行き、砂の中を転がす。砂鉄がくっつく。これも面



白い。時には砂浜にきらきらと宝石のように輝く石を見つける。瓶のかけらが波に磨かれ、日の光に反射している。ゼンナと呼んだハマグリ取りに興ずる。これは砂を吐かして翌日のおかずになった。潮吹きという小さい貝も波打ち際にたくさんいた。ナガラミという美味しい巻き貝もいたんだ。ちょっと深い沖でないと採れないから泳ぎのできない自分には無理であった。

満潮のタイミングでちょうど地引き網を引き



上げる場に遭えば、網を引き上げるにつれて波打ち際に逃げて来た魚を捕まえることができた。引き上げている人たちに邪魔だと怒鳴られながら、アジ、鰯などが浅瀬にこぼれて逃げて来る、それを捕まえる。なかなか捕まるものではないが、鰯などはその場で手開きして海水に浸けて口に放り込み食べる。うまいぞー！アジもそう。ゼイゴを引き剥ぎ、腸わたを摘まみ取り海水に浸けてその場でかぶり付く。

砂浜から遠くへ投げる、投げ釣りをしている人達もいた。ちょうどエイが釣れたところに遭遇。水辺に引き寄せられた時、エイの子を数匹産み落とし。エイは卵でなく子を産むのである。釣り師はナイフが必需品でエイの尾の付け根にある毒針を切り落とす。これをまず最初に行わねば危険である。

## 十一・手伝う

### 畑作業

畑仕事の手伝いにはあまり覚えが無い。それでも、野菜の作り方は知っている。鋤を使って畝の作り方も知っている。これからみて母親の手伝いでもしていたのだろう。稲作に比較しやさしかったからか、或いはフナを生け捕

るような遊び要素が無かったせい、見ていただけなのかも知れない。子供の頃の記憶は確かなのだろう。数少ないお手伝いでさつま芋、ジャガイモ、さと芋などの植え方も知った。保存の方法も、土を掘り稲藁を敷き詰めて保温し冬を越すことも。春になりさつま芋の芽が出て、そのさつま芋から芋苗を採ることも知った。ジャガイモは、芽の出る凹みをキズつけないように、二個か三個に切り分け、切り口に藁を燃やした灰をまぶして植え付けた。これも知恵である。

高学年の頃か親父が茂原駅の近くに畑を借りてさつま芋の栽培をした。デンプンを摂ることが目的のさつま芋である。農林何号とか言う。さくを切った畝にさつま芋の苗を差し込むようにして置いて行く。上から土を被せて植え付けはおしまい。葉が蔓延り始めると、収穫までに何度か蔓を土から剥がす作業がある。これが結構大変な作業である。収穫時、大部分の芋は畑から直接、業者が持って行くのであるが、一部のさつま芋はリヤカーに積み家まで運んで来た。ある時、帰るのが暗くなった。親父がリヤカーを引き、私が懐中電灯を持ち、後ろから押した。前から車がきて、リヤカーの右端にぶつかる。幸い怪我は無かったから良かったが。私がリヤカーの前方を照らさな



かったのが悪い。車の方も当時三輪車であつたから見えなところ同士でぶつかった。反省すること頻りであつた。

さつま芋に花魁（おいらん）という種類が有つた。これを蒸かし、乾燥芋にする。二階の瓦屋根に広げ干す。二、三日後の状態は柔らかく、非常に甘くなつて食べ頃である。屋根に上り横になつて、日当たりながら食べた。これが美味しく乾燥途中で無くなつてしまふ事多々ある。

芋と言えば自然薯だろう。茶の木が家の周囲にあつてそれに自然薯のツタやカラスウリのツタが絡み合つていた。ムカゴやカラスウリになる。自然薯は時期になれば、茶の木の元を掘る。根と根の間に入り込み難しい掘りかたで必ずと言つていいほど途中で折れてしまふ。芋をすり下ろし味噌汁を加えて薄め、ご飯にかけて食べる。する道具はすり鉢である。

先に竈の前の煮炊きする時の楽し

さを書いたが、竈の燃料は山から採ってくる茅や木の枝だ。勿論枯れていなければ燃えない。線路の脇に、下草刈りをするため林を借りていた。その下草や落ちた木の枝を乾燥させ、燃料としていた。山林の持ち主にとっては、下草が刈られきれいになるので都合が良い。ここでもリヤカーが活躍する。どこの家にもリヤカーは有ったと記憶している。

線路の両脇には細い溝が掘ってあり、湿気があり苔など生えていた。もうせん苔という食虫植物も生えていて、当時でも天然記念物であつたが、虫が捕まりもがいているのを見ていた。葉がネバネバしている。房総東線の長い直線部分で、茂原駅手前でカーブしている。茂原駅方面からくる汽車は見えない。線路に耳を当ててゴトンゴトンという音を聴く。山刈りのさなか、わざわざ聴きに行く。二時間に一本位しか来ないから大体の時間は判かつていたのだろう。二銭玉だか五銭玉だったか価値の低いコインを線路に置いて潰してみたりしている。かなり危険なこともしたんだな。今なら確実に補導される。風呂焚きにもこの燃料は使う。太い木は薪割りをする必要がある。薪割りを使って細く割るのは結構大変で疲れる。風呂水は井戸から汲んでくる。これも男の子の仕事。風呂を沸かすのも姉と交代で行った。



## 田植えの時期に

初春から夏にかけての手伝いは面白かった。代掻きやあぜ道の修復は重労働で牛の出番であった。あぜ道は「クロ」と称した。あぜ道にマンノで土を盛り鍬で撫でながら修復していく。その色が黒かったので「クロ塗り」といったのであろう。このクロ塗りができると子供も一人前である。苗代にする田んぼが堰き（貯留池）の近くにあり、その堰きから苗代に水を引く。稲作はこの苗代の手伝いから始まる。しかし水を引くときに流れ出るフナがいて、子供はこのフナつかみの方が面白いに決まっている。当然である。十時のお茶時間や昼休みはフナつかみである。手のひらサイズの比較的型の良いフナであったのでさらに面白い。そう簡単には捕まらないので興奮して追いかける。ずぶ濡れになりながら、何匹も捕ったな。親父や叔父さんも一緒にだ。

苗代作りである。代掻きが終わったら水を抜き、一メートル幅位に手や鍬で土を盛り上げる、木のヘラで平らにならす。盛り上げた部分が湿る程度の水量すなわち泥が落ち着き、動かない程度に固まったなら、湿して置き発芽仕掛かった耨を均等にばら蒔く。その上から筒状の転がしを使い種耨を土の中に押し込む。こうして発芽を待つ。発芽するまでの間は細かく水量を調節

した。また鳥に食べられないよう種粃の上に粃殻を焼いた物を撒いていた。ヘラは木材の丸みの部分を利用する。一メートル程の長さで撫でることができるよう取っ手がつけてある。撫で作業はちよつと無理だったか。転がしも直径十センチ長さ五十センチ位の筒状に細かい金網を張る。心棒を通して柄をつけ、熊手のように前後に引いたりして転がす。これで粃を苗床に押し込む。これは子供にもできた。粃殻を炭化するのには簡単だ。煙突にする底の方に、いくつか小さな孔を開けた筒を立てる。筒のまわりに少しの枯れ葉を置き、火をつける。子供にとって火遊びは楽しいのだ。そのまわりに大量の粃殻を被せれば自然に炭化が広がってゆく。適当なところで広げ、水をかけて消さないと皆白く灰になってしまふけれど。

二十センチ程度に育ったなら、苗代に樽椅子を持ち込み、腰掛けて苗を引き抜くようにむしり取る。手で廻める程度の量で握り、腰に束ねて刺してある稲藁を、二、三本抜き取り、クルクルと苗束に巻き、藁の先を親指の腹で折り、巻いた藁に挟み込むようにし、固定する。藁も下葉の柔らかい葉は揃うようにして除いておくと使いやすい。この束ねた苗を、浮かべてある田舟に放り込む。集め、田植えをする田んぼに運び、田んぼのあぜ道から適当な

配置に苗を放り込む。そして田植えが始まる。

田植えもちろん手伝った。裸足で入る田んぼの土の感触、指と指の間に  
入り込むヌルリとした泥の感触は忘れられない。田舟に苗を乗せ、田んぼの  
真ん中に運び、適当な間隔に一束一束と置いて来る。田舟に乗るのが面白く  
て。田んぼの中を歩いていると、もちろん裸足であるからヒルが吸い付く。  
何時付いたか判らないが付いている。これは気持ち悪い。タンケという黒い  
こぶし大の貝も足にあたる。田んぼでのお茶やお昼のにぎりめしやお新香の  
美味しさは殊の外である。子供は飽きてしまい、先に帰させられる事多い。  
田んぼから帰る途中にはこんもりとしたあぜ道の境があり、そこにグミや木  
イチゴ、ドドメが黄、赤、紫などに熟していてそれをついばんでみたりする。  
秋の稲刈りまでの成育時期には手伝う事は無い。が、前にも書いたように  
夜にドジョウを捕まえに行く。ウケをセットし、これもドジョウを狙う。稲  
刈りした後は沼の水溜まりで雷魚や鰻を狙う。時期の稲刈りや圃を作つての  
稲干しは力仕事であるが難しいことはない。終われば小さい穴を見つけては  
土のなかのドジョウ捕りか、逃げ舞うイナゴを追いかけた。イナゴは鶏の餌  
である。

古い発動機を回して、稲こぎをする。当初は足踏み機でギーコ、ギーコギーコという音を出していたが親父が中古の発動機を入手した。発動機との接続はベルトである。稲こぎ機との間隔はベルトを文掛けにして、発動機を移動し杭で固定する。起動は手回しである。タイミングよく離さないとバックフラッシュでフライホイールが逆転し怪我をする。子供にとってはかなり力が必要。古いが故に時々分解し、プラグの掃除やら、発電機の放電のタイミング調整をしなければならない。あるとき燃料タンクからガソリンを抜く必要があり、口で吸い出すことを試みた。親父がやっていたから真似たのだが、タイミング悪く、ガソリンが口に入り、ひどい味わいをした。使う度ごとに分解、調整が必要であったので、とうとう新品を買う。それ以来発動機の分解はしていない。機械いじりが苦にならないのもこの時の教訓か。苗代作り、田植えから稲刈り、脱穀、選別、モミスリ、精米と全て小学生高学年までにはできた。ク口塗り、即ちあぜ道の修理や代かきは力仕事、牛を使う仕事で、これはできない。専業農家の叔父さんに依頼していた。

あとがき

ドジョウにしてもザリガニにしても食べるためには数が必要。一匹二匹捕まえる訳ではない。数を捕るためには工夫が必要になる。まず多くいる場所の目利きが必要。何処にドジョウが潜んでいるか、ザリガニはどの田んぼで捕れるか、鰯の溜まり場所は何処か、シーズンは何時か、そんな事は自ずと知っていた。勿論釣り針はどこで売っているか、何処から竹を採って来るか、餌は何にするか、どこで餌を捕まえるか、ミミズのいる場所など、当たり前前の知識である。餌に工夫、道具に工夫なども臨機応変である。

記憶に残る、手伝いや農作業のやり方は江戸の時代とあまり変わりなかったのかもしれない。本多豊著「絵からわかる知らなかった江戸のくらし 農山漁民の暮らしの巻」遊子館、を読むとそう思う。渡来したザリガニと導入された発動機程度が異なるだけで、本の絵の中に出てくる事とあまり変わらない。それが発動機を入手した頃から、またホリドリル、パラチオンなど農業を使い始めた頃から一変したように思える。子供が手伝う機会が失われたようだ。さらに下って、熊谷のようなこんな田舎でもコンピューターゲームに夢中になっている子たちの多い現代とはかなり異なってしまったか

も。ここは山や川に近く、遊ぶ所はいくらでも在るのだが、注意事項多く、禁止事項多く外で遊ばない。子供たちの生活も急激な変化であろう。良いことか悪いことか判らぬが、大人も子供も自然に対する興味や感受性が鈍っているのではないか？

昔と今と将来、果たしてどのような社会が良いのであろうか。私の偏見に基づいて、予想される幾つかのこれからの社会パターンを考えてみる。

#### その一 教えられ続けた人達の社会

幼稚園から大学まで、さらに仕事に就いた初期まで、ずっと人に教えられ続けられる現代人である。自分で考え工夫する力が弱いことは自明の理であろう。それでも天性を持つ人はそれなりに創造性を育くんでゆくであろうけれども、大多数の普通の子たちは自然の掟に鍛えられる事なく、平和ぼけと揶揄されながら大人になり一生を過ごす。

共働きを勧める時代だ。親が忙しい、子供たちの遊ぶ安全な場所が無いなどという理由で託児所的保育園を作る。これが狭い保育園だから、単に成長期間を過ごさせているだけにならないよう、小学生に優るいろんな教育をする。英語やコンピューター知識なども教える。小学生は授業済んだ後でも学

校に留まり、帰れば塾通い、そしてテレビにスマホ。自然との対話なんてほんの少しだけだ。自然は映像で見えるもので体験するもので無くなっている。田舎に回帰する人、泥遊びする小学生がニュースとして流れる。ニュースでなく、当たり前前の事として報道されて欲しいものなのだが。

年を経ても年金で老後を楽しもうとする事が目的では無い。ただ働き続ける事が目的になり、働く以外に趣味が無い。定年後にすることが無いから闇雲に勤めを継続したがる。一方でこれ幸いと六十歳超えても働かせる社会である。天変地異あっても生活は保証され、無気力に一生が過ごせる平和？な社会。誰かが助けてくれるから良い、環境がそうになっているから良いという思想が蔓延している。自然を体験していない人たちが親、指導者、マスコミ、政治家を構成しているから、助けられてくれないと苦情を言う、誰かを辞めさせろと騒ぎ出す雰囲気当たり前前の社会でもある。

## その二 幼少時代をコンピュータゲームのみで過ごした人達の社会

子供たちに対しても国を挙げてコンピュータを配布、使用する教育であるから幼少時代からスマホは当たり前前にこなす。その手つきは見事である。知識もスマホから得る。大人顔負けの、尋常ならざる知識を遙かに超える、そ

んな子供たちがいる。電子ゲームに教えられ続けた人の特徴は、とにかくでき上がっている物に、すなわち工作物（人工知能ロボット）に慣れ、マニュアルその通りに使いこなし（使われ）、人目に力強く見える。働く作業に工夫する必要性は無い。ロボットのやる事や、自動運転車は不可欠で、あたりまえの事として扱う。そのような人達の多くいる社会。

一部のソフト製作に長けた創造性を発揮する人間がいる一方で、その人に創られたものに操られ、牛耳られたように画一的な作業をする一般の人達である。結果として、（作られたソフトを内蔵したコンピュータに使われ）ロボット化する人達、（人工知能と称するIT技術で）皆が一樣な顔を持つ人達になる。大部分の人達がコンピュータの踏襲で生活できる。自然界に触れずに一生を終える事が出来る人達。このような人達が増殖した社会がある。

老後も新しいロボットの使い方を覚え、さらに新しく出るロボットに関する勉強をして勤めを継続する。すなわちロボットに使われる人生を過ごす。それで終わる。電子ゲーム的パチンコ、賭け事に霧中。若い人が、遊びに行く先は作られたテーマパーク。このような人達は殺戮シーンに慣れっこになっている。コンピュータを使い続ける事が趣味。すべてがテクノロジ化する

と何をするにも金がかかる。結果、欲求不満の自殺者が多い都会人社会。

最近二十三才の会社員が近所の小学二年生を連れ去り殺してしまった。線路内に遺棄して電車に引かせた。また若い夫婦がイジメで食事を与えず、五歳の子を殺してしまった。この若者達、普通のよい子のような顔つきだったが。この人達などもずーっと自然の事象や四季の移り変わりなど知らないでいたんだらうな？

普段コンピュータゲームに夢中になっている、たまたま遊びに来たその子を近所の川に釣りに連れて行った。初めて手にしたフナをぶら下げ歓喜してた。後にこの子から感謝状を貰った。パバママも普段経験させることのできないような遊びができたと喜んでいた。かえりみて本当に自然に対する感受性を失ってしまつて良いのだろうか。このような単純な疑問から私が思う理想的な社会を推測してみた。

その三 いろいろ自然体験をした子供たちが育つ社会

三割四割三割の遊びをさせたい。すなわち幼少時代を教養課程よろしく農漁村地で過ごさせ、或いは田畑を持つ保育園や小学校で過ごさせ、中学生の

ように大きくなってから都会的生活（コンピュータに囲まれた生活）をさせる社会はどうか。楽しそうだね。さすればロボットやコンピュータを工夫して使う方に体が動き、定年後のサバイバルにも順応できるのではないか、と思う。自分で出来ることは自分でやるという夢追い人にしたい。海近くの子は海遊びに夢中になって欲しい。森近くの子は山狩りに夢中になって欲しい。川近くの子は魚釣りに夢中になって欲しい。すなわち食べるための糧になる遊びをする子供たちであって欲しい。感受性の強い間に買って食べる行為だけで無く、自分で育てた物を食べる、自分で捕まえた物を食べるという行為を経験しておくべきでは無いだろうか。定年後は自然界の中で動植物と共に生活したいと願う人達が多くいる社会であって欲しいが。

その一、その二の社会について、信じられないことであるがその兆候は有る。電車内で親子三人それぞれにゲーム？を楽しむ家族を見た。座るとすぐにiPadを開きヘッドホンを付け、降りる迄何もしやべらずにゲームに熱中している。違和感を感じざるを得ない。また、オリンピックのマスコットさえもどこかのオリンピックマスコットと良く似ている。特に創造的だというようなものでは無い気がするが？絵

を描くにもお絵かきソフトで、音楽を作るのも音楽ソフトの範囲で作る。その結果ではないのか？二者択一に近い状態で子供たちに選ばせて喜んでいる。どこに創造性の広がりがあるのかな？いずれ宗教も何々コンピューター教になるかな。一足先に進む裕福なシンガポールやアラブ首長国連邦の子供たち大人達はどう感じているのだろう。彼の国の便利さ、都会さだけが強調され報道されるが？

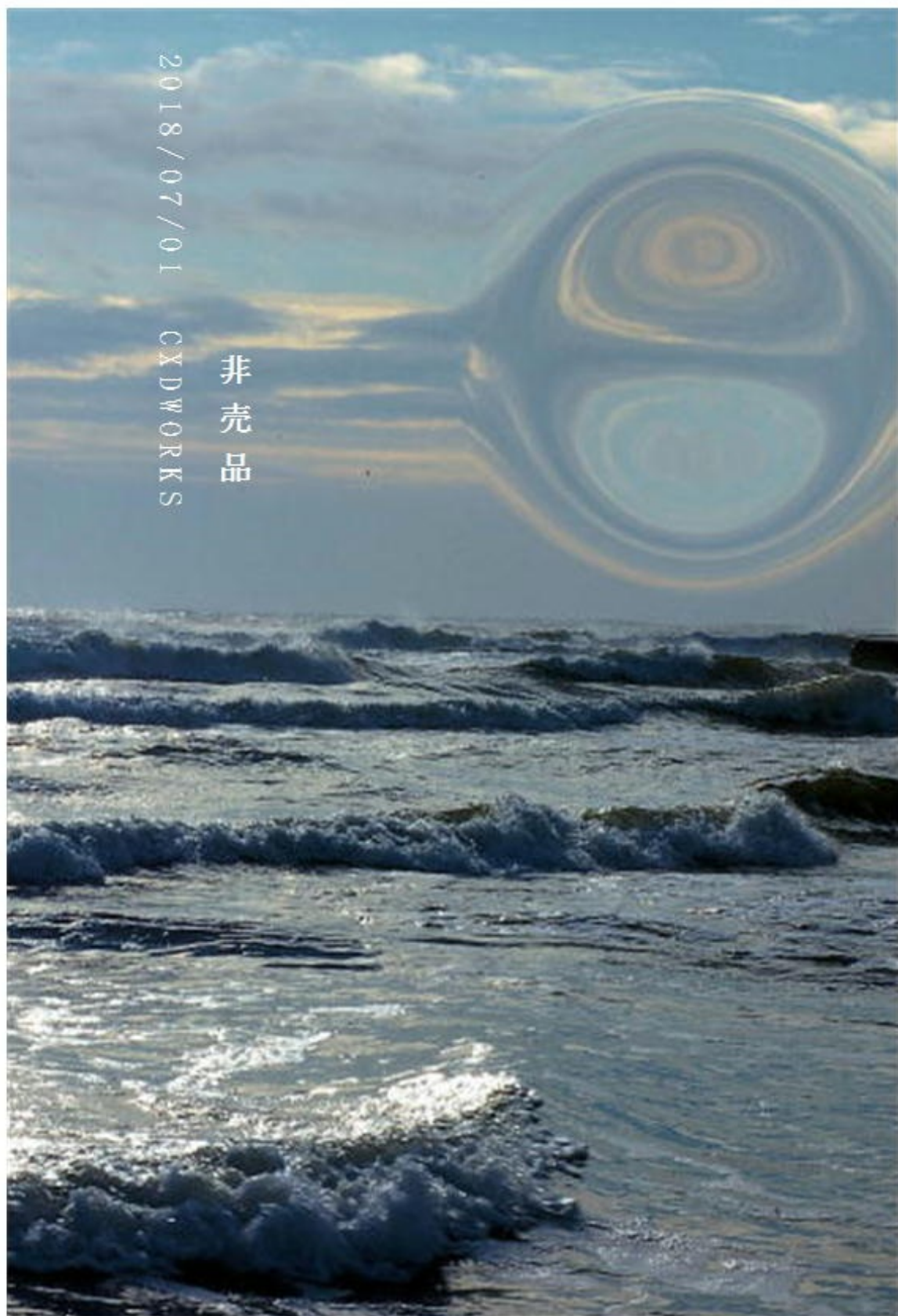
今の社会について行けず、死にたいと言う中高校生がいる。このような人達が出ないようにするには、感受性の強いときに自然に対する創意工夫の力を付けねばならないと思うのだがどうであろう。天変地異を生き延び、心のサバイバルを乗り越える事ができる人達とは想像力のある人達であり、田舎育ちの、自然を経験した人達だけのようには思える。故に幼少時代の遊びだけでも自然に触れあう遊びが中心で無ければならないと思うのだが。敗戦後に惨めな経験を書いた人達は攻撃を受けた方々、都会人や兵隊さん達で、地方の農漁村の人達は、ちっとも困っていなかった？のではないか。若者達を兵隊にとられる以外には。でなければあんなに明るい戦後を感じていたのであろうか。開放感だけであつたのであろうか？そんな事を思いながら、自分が過ごした子供の頃の遊びを記してみた。何人かの若い人達がこれを読

み、都会を離れた生活に挑戦する気になって頂ければありがたい。とにかくくにもソフトウェアを作る連中に洗脳されるなど言いたい。機械は使えるがITには使われるよ！



## 目次

まえがき	二頁
一・最初に	七頁
二・学校帰りの途中は	十三頁
三・遊び各種	十六頁
コマメンコ（面子）メン棒 将棋やかると ビー玉 鬼ごっこや馬乗り 風あげ フラフープ・自転車乗り 兵隊蜘蛛の戦い	
四・飼う	二九頁
にわとり 捕ったものを飼う	
五・栽培した物を自分で料理する	三六頁
ご飯の釜炊き	
六・捕まえる	三九頁
昆虫を デンブン工場とトンボ採り バタリと鳥餅 蚤い捕り フナ釣り ドジョウを捕まえる ザリガニを釣る 夏の田んぼ 山狩りの探検	
七・作る	五九頁
鉄砲いろいろ 糸巻き戦車 竹トンボ 釣り竿作り 編む・縫う	
八・採る	六八頁
採って食べる 薬草を採る 山菜を採る	
九・祭り	七二頁
ヤリカンカー 天神様	
十・夏休み	七五頁
母親の実家に 海水浴・ハマグリを採る シジミ刈り お盆 春休み	
十一・手伝う	八二頁
畑作業 田植えの時期に あとがき	
	九十頁



2018/07/01 CXDWORKS

非売品

## 子供の漁・狩猟

<http://p.booklog.jp/book/123112>

著者 : mcxdworks

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/cxdworks/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/123112>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト